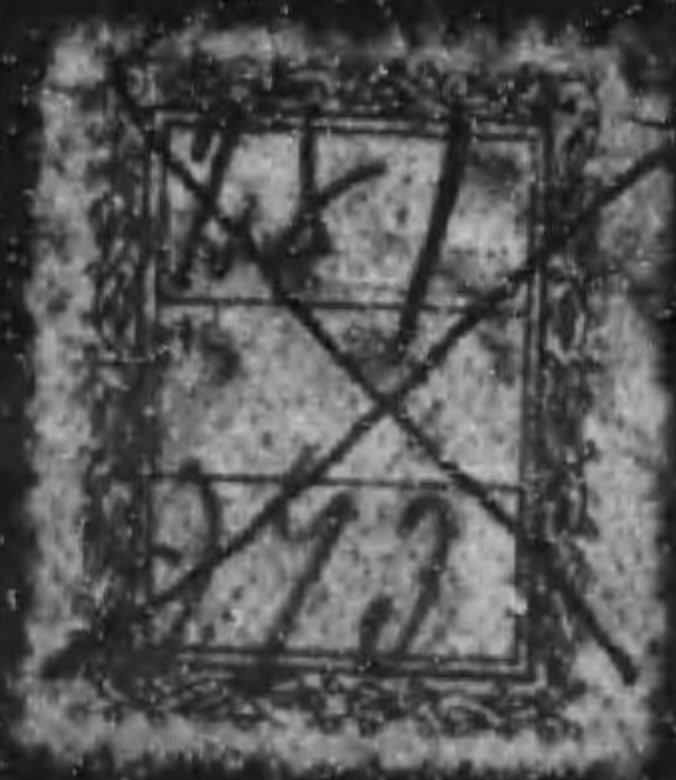


叛送者の母

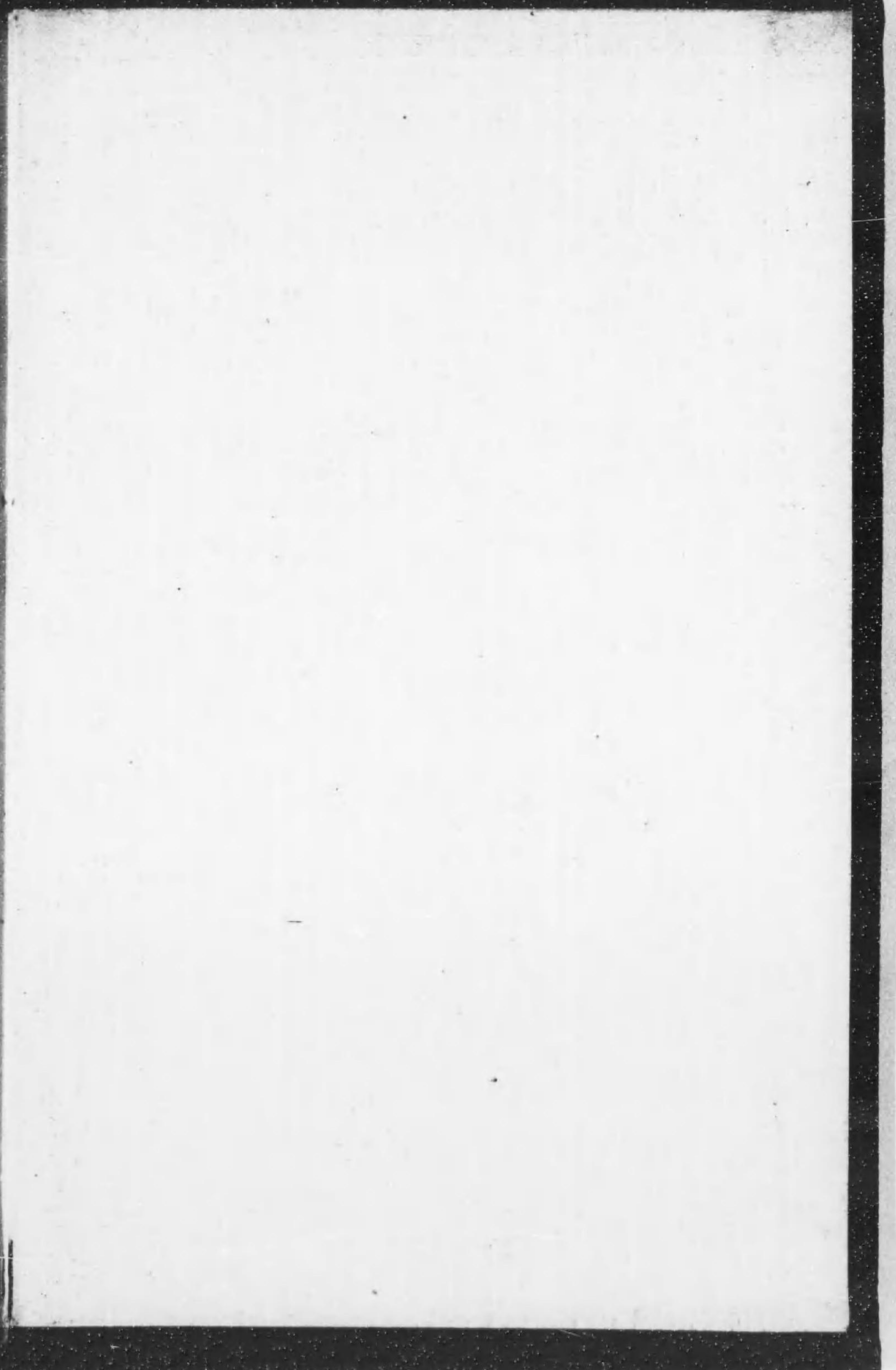
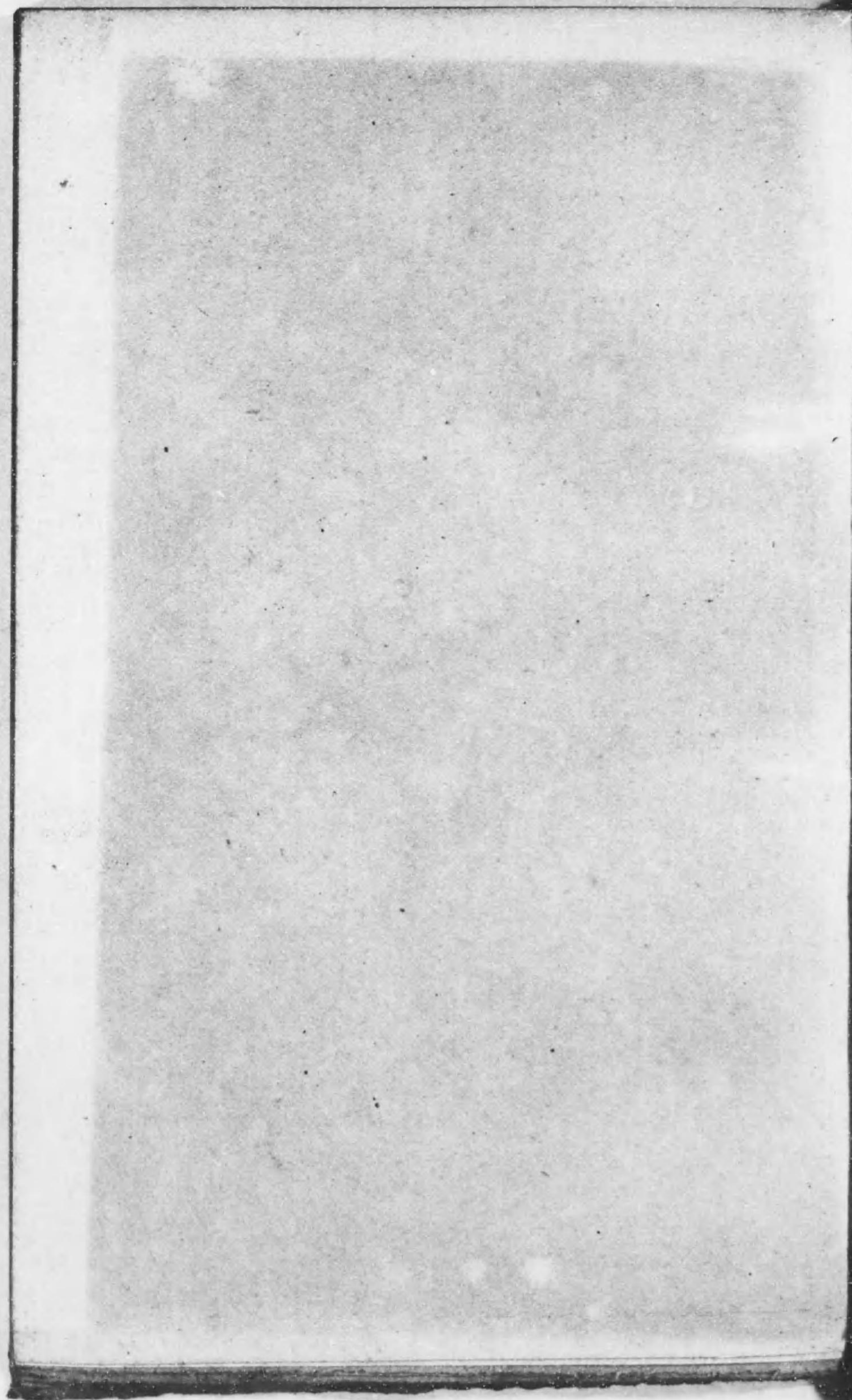
コルキイイ作  
渡平民譯



始









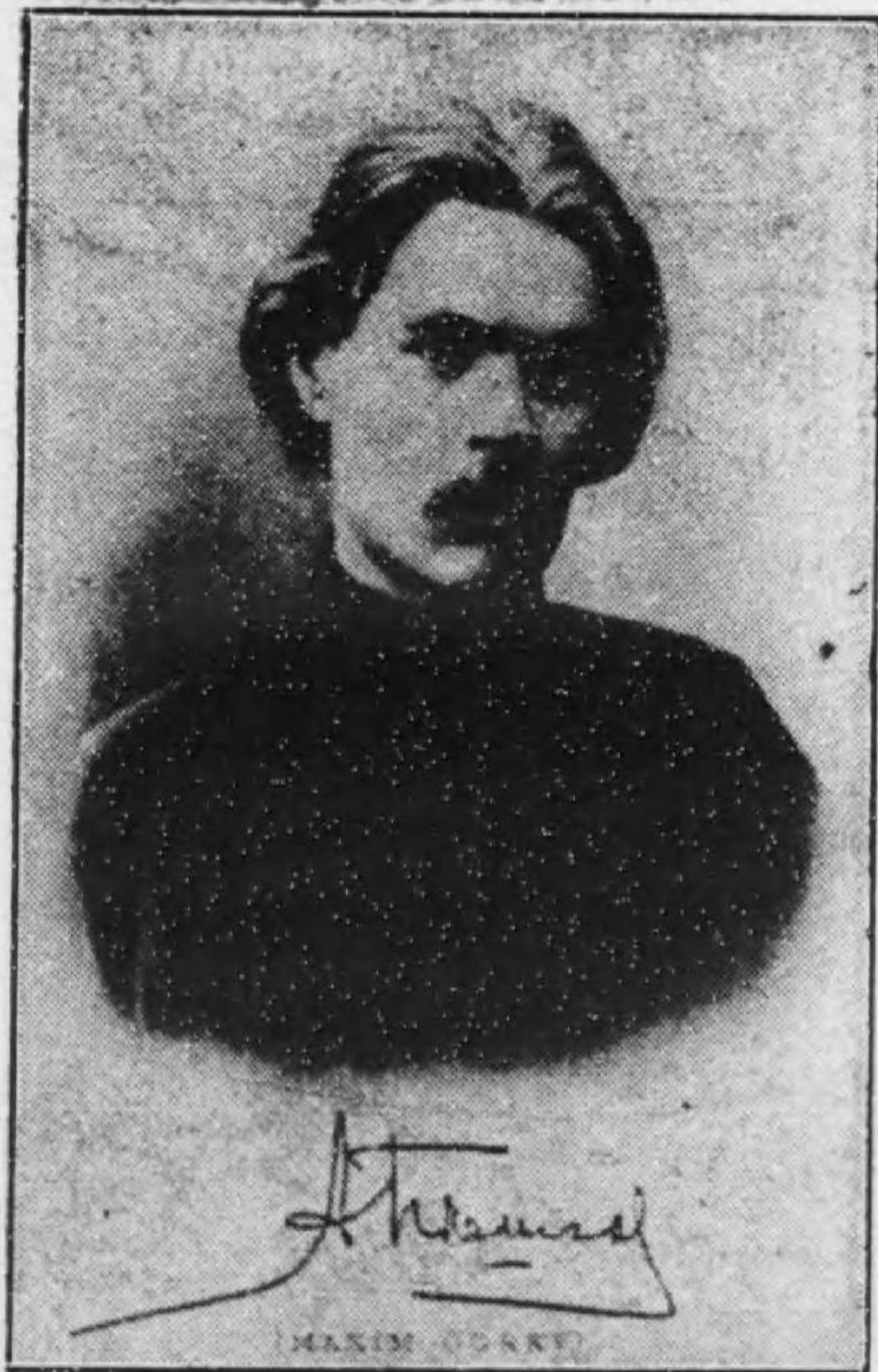
特109

288



叛逆者之母

作イキルゴ  
譯民平渡



大正

9. 3. 30

内交



## 序

友人渡平民君の『叛逆者の母』が巷に出ることになりました。渡君にとつてはめでたい處女出版であります。同君がゴオリキイの作品の紹介を文壇に本流の乗り出す第一歩の仕事として選ばれたことは、同君の思想なり、主張なりの傾向からして極めて自然な行き方であつたと思ひます。

殊に『叛逆者の母』のなかに納められた十幾篇の作品は、一つ一つが光つた散文詩の素直さと暗示と魂の香とを持つてゐます。ゴオリキイの作品のうちでも珍らしいほどやさしい人情味を豊かに持つた收穫であつたことを私は心からうれしいと思ひます。



「叛逆者の母」はやゝもすれば今日までの我が文壇のゴオリキイ紹介に缺けてゐたところの、かれの愛すべき、親しむべき同時に何處までも温かい涙を持つた懐疑的な詩人らしい方面をはつきりと見せてくれたと思ひます。

渡君自身が一面に於いては革命家らしい極めて強い熱情の人であるが、他面に於いては弱過ぎるほど感傷的な詩人であるのと思ひ合はせて、同氏の處女出版『叛逆者の母』は一層の興味を私に抱かせます。

この眞率な努力が成るたけたくさんの人々のうちに、よろこび迎えられることを心から祈ります。

吉田 絃二郎

2

## 序に代へて

アレキゼイ、マキシモヴキツチ・ブセシコフとはマキシム・ゴオルキイの本名である。彼は一八六八年三月十四日にニジイ・ノブゴロツドのどん底生活者の子として生れた。母はヴァルヴァラと云つて染物屋の娘、父は貧賤な室内裝飾の職人であつた。彼は三歳にして其父を失ひ九歳の時母をも失つた。斯くして孤兒となつた彼は母方の祖父に引取られて小學校へ通つたが、間もなく天然痘に冒されて學校を退いた。彼が正式に授けた教育と云ふものはこれが凡べてである。

1



其の後、彼は靴直しの職工からペンキ屋の手傳ひなどをしたが、彼の讀書慾を刺戟し彼に文學に對する愛を與へたのは、彼がヴォル河で蒸氣船のボーイをしてゐる時、同船に雇はれてゐた料理人であつた。さうした欲求にかられた彼は遂ひにカザン大學へ赴き、無月謝で入學を許して貰らうことをせがんだが、大學から拒絶されるに及んで生活難の壓迫から或るビスケット製造所へ雇はれることになつた。當時の暗澹たる生活は「二十六人と一人」の中に描かれてゐる。

それから後の彼の漂浪生活の跡は「棘石」「草原」及び「秋の一夜」等の諸作に現はれてゐるが、或は或時は木挽職人となつたり、

荷場人足となつたり、林檎を行商して歩いたりした。又は踏切番、補充兵、辯護士の秘書官にもなつたりして、有ゆる生活苦を嘗めながら社會のどん底を流浪して渡つた。この間の生活から「チエルカツジュ」が生れたのだ。

一八九三年に及んで彼はラニンと云ふ辯護士の紹介で當時文壇の花形コロレンコと知つに至つた。コロレンコは彼の才能を認めて彼を極力文壇に推選することを骨折つた。斯くて今迄の浮浪人であつた彼は一躍文壇の人となり、彼の作を諸新聞雑誌が競ふて載せることになつた。

然し彼は警察の殘酷を批難したため、警察の壓迫を蒙つて暫くク



リミアへ亡命することになった。

「叛逆者の母」は彼がこの南歐伊太利へ亡命中の記念として、伊太利の自然とそして伊太利人の生活を材題として描いた、原名「物語」と稱する單篇傑作集である。

彼は其の後或るストライキに加擔して皇帝に陳情書を捧げようとした結果「血の日曜日」と稱せられてゐる日に多くの犠牲者と共に捕はれた。露西亞革命後、彼は一時文部大臣の榮職に着いたとも傳へられ、最近過激派の爲めに銃殺に處せられたとの風聞も傳へられてゐる。

彼の有名な長篇としては「母」「懺悔」「三人」「フオーマ・ゴルデ

エフ」戯曲では「夜の宿」「太陽の子」「氣取つた市民」等の諸作があるが、偉大なる單篇作家としての彼の作を代表する者は、この「叛逆者の母」即ち「物語」であることは云ふまでもない。

終りに此の書の出版に際し、是迄私の内部生活に對して多大の感化を惠まれて下されてゐた吉田絃二郎氏に感謝を捧げます。尙ほ友人森靜香さんの御盡力を記載する義務が有ると思ひます。

大正九年三月

研究座稽古場にて

著者識



目次

叛逆者の母……………一  
人間とシンブロン……………三二  
書かれざる曲……………四九  
太陽と海……………五九  
戀人の愛……………七五  
信仰と主義……………九三  
畸 形 兒……………一二三  
社會主義者……………一四五  
汽船の上……………一七一  
海からの使……………二〇四  
村の名譽……………二三一



叛逆者の母

母性の方..... 三〇一

——なはり——



## 叛逆者の母

母といふ者について傳へられた物語は澤山ある。

今や、其町は武備を凝らした敵兵の重圍の中に數週間をすごした。毎夜篝火かぶりびが燃やされた。數限りもない篝火が赤眼のやうに燃えたち、闇の中から城壁を睨にらみつけてゐた。篝火の炎ほのほは町の人々に何物かを暗示するやうに、不吉な輝きを示してゐた。そして城壁を遠卷にしてゐた敵の輪付わつきが段々引き締められて來た。炎の四週まわりを動く黒い影が見え出した。逞しい馬の嘶いなき、武器の響、勝ち誇る人々の痾かんだか高い笑ひ聲や、喜びの唄聲が聞える——敵兵の笑ひ聲や、唄聲を聴かされ



るほど悲痛な事があらうか？

敵兵は、その町へ給水する河を屍で埋めた。彼等は町の周囲の葡萄園を焼き拂ひ、野原を踏みになり、近邊一帯の樹木を残らず伐り倒し、四方から町をむきだしに晒した。そして敵兵は終日絶間なく、鉛や鐵の矢弾を鐵砲や施條銃で浴せかけた。

半飢えになつた兵士の幾群もが、小せり合に疲れきつて町内の狭い道を過ぎて行つた。家の窓からは、傷者の呻き聲、發狂人の譫言、女の祈禱のささやき、子供の喚き聲が洩れてゐる。總ての人は壓へ附けられたやうなささやかな調子で話し合ふ。そして、時々敵兵が町を襲撃に取掛りはしないかを窺ふ爲めにちつと耳を澄まして、お

互の話を途中で止めたりする。

呻き聲が段々烈しくなつて、静けさの中に瞭りしてくる夕暮、遙かの山の谷間から青黒い影が徐徐に匍匐寄つて敵の陣營を掩ひ、見る影もなく破壊された城壓の方へ動いて來たり、黒づんだ山の頂に重い劍で一撃の下に切斷された鋼鐵の切口のやうに、ギラときらめく月が飛び上つた夕暮、かうした夕暮ほど、人生に堪へ切れぬ時があらうか。

苦痛と飢餓の中に、何んの救ひもなく、望みもなく日一日と絶望へ進み行く人々は痛ましげに月を仰いだり、悲しげに山の鋭い峰や黒づんだ頂を見上げた。そしてざわめく敵陣を恐ろしげに眺めた。



——一切の物が彼等に死を語る。そして彼等を慰める一つの星もまばたいてはゐない。

彼等は家の中に灯をつけるのを恐れた。

深い霧が町を包んだ。この霧の中を、河底にゐる魚の様に頭から足の先まで黒い外套まんとで身を包んだ一人の女が、彼方此方を静かに遊ぎ廻つてゐる。

人々はこの女に目を据えて話し合つた。

「彼女だね？」

「彼女だ！」

そこで彼等は戸口の蔭に身を寄せて、頭を竦すくめそつと彼女を過ぎ

させた。張番の役に當つてゐた男が、彼女を捕へてつげつげしく口を切つた。

「また通をうろついてゐるなマンナリアナ、えい？ 氣をつけろよ！ お前は殺されてしまふぞ。そして誰も犯人を捜すやうな者は居ないんだからな」

彼女はぎよつとして立ち止つた。そして張番の次の言葉を聞かうとした。然し、張番はそれ切り、彼女を咎めだてもせず黙つて行き過ぎてしまつた。武装した兵士達は彼女が屍でもあるかのやうに彼女の周囲を歩き廻つてゐた。

而も彼女は薄闇の中をさまよい歩いた。通から通へ静かに動いて



行つた。ぼつねんとした静かな暗い姿は町の不幸を人格化したやうにも見えた。

呻吟、啜泣、祈禱、そして勝利の希望を全く失つた兵士達の物悲しげな歎きは彼女の周圍に渦を巻いて彼女の後を追つた。

彼女はその町の住民の一人であり、一個の母であつた。彼女の想は息子と町の上に塊つてゐた。

艶々しい姿で、然し残忍な壯快な性質を持つた彼女の息子は、この町を破壊しにかかつてゐるのだ。彼は逆徒の指揮官となつてゐるのであつた。近頃まで、彼女は故郷に對す貴重な贈物として、彼女は其處で生れ、彼女の息子を其處で生み、そして養つた此の町の幸福に

對して、彼女の生んだ息子が偉大な力を持つものとしての誇を持つて息子を見てゐた。ばら／＼に燃えひろがる無數の篝火を見てゐる彼女の心は、ふと古い石の事を想ひ出した。其等の石で彼女の祖先は館を建て、城壁を築いた。そしてその城壁にかこまれた土の下に彼女の血族の骨が埋まつて居る。彼女は此の地の古傳、民謡、希望とを種々想ひ續けてゐた。

今や、彼女のかうした心の想は、彼女の最も深愛してゐる息子の事さへ打忘れた。彼女の心は、愛は、息子と町との二つの上に分割されてゐた。然し、自分の息子に對する愛が町に對する愛よりも深かつたと云ふことの中には一つの自然らしい調和があつた。何れを



深く愛するかを決定するのは不可能ではなかつた。

かうした心持ちを抱き乍ら彼女は夜の通をさまよつてゐた。彼女を目に觸れた人は、さう多くでもなかつたが、彼等はその黒い姿を、漸次自分達、この町の者全部の身に迫りつゝある死の影でもあるかのやうに思つて、驚怖の念をそそられた。彼女を認めるや、人人はその叛逆者の母を避けるために皆道を急いだり外らしたりした。

或時の事であつた。彼女は城壁の荒れ廢てた片隅へ一人の女と摺違ひにやつて來た。この女は一つの屍の側にうづくまつて星を仰いで祈禱に耽つてゐた。頭上の城壁の上には哨兵がこつそり話を交へてゐた。彼等の手に携へた鐵砲は、でばつた石に觸れる度にコツコ

ツと音を立てる。叛逆者の母は尋ねた。

「貴女の御連合は？」

「居りません」

「御兄弟は？」

「息子も、夫も、十三日前に殺されました。この日曜日です。」  
そこで死人の母は身を起して蔑すむやうに云つた。

「マドンナ様が總ての事を御覺になつてゐるのです。そして何もかも御承知で仰居る。妾はマドンナ様に感謝してゐるんです！」  
「何をです？」

マリアナは尋ねた。すると、他の女は答へて云ふには、



「今、彼が生地の爲めに戦つて譽を以て埋れたといふ事ですよ。彼も、時には私を随分心配させましたとも、彼は向見ずの氣まぐれ者でしたから、マリアナの息子の様に神に背き人間に背き、敵の指揮官となつて、町を攻撃しやしないかと怖ろしい氣をさせられた事もありました。神の敵、人間の敵、マリアナの息子を呪へ、彼奴を生んだ母を呪へ！」

マリアナは顔を掩ふて一散に姿を消して失つた、次の日、彼女は町の守備兵の處へ行つて言つた。

「私の伴が、皆さんの敵になつたのですから、私を殺すか、さうでなければ開けて、私をあれの所へやつて下さい」

守備兵は答へた。

「お前はこの町の市民だ。町はお前を愛さねばならない。お前の息子が、我々市民の敵であるやうに、お前に對しても敵なんだ。」

「私はあれの母です。私はあれを愛してゐます。あれの犯した罪は私の罪だと思ひます。」

守備兵達はどうしたものかと相談した擧句、その處置を決めて彼女に言つた。

「我々はお前の息子の罪の爲めに、お前を殺すと云ふ事は我々の名譽にかけてもやることは出来ない。我々はお前が息子を唆かしてこんな恐ろしい罪を犯させる事なんか出来ない女である事をよく



知つてゐる。でお前が息子の犯した罪の爲めにどんなに惱んでゐるかも察する。お前は人質としても、この町には用のない女だ。お前の息子はお前の身なんか苦にはしてゐないからな。恐らく彼奴はお前の事を忘れてゐるだらうよ。悪魔——若しお前がその事が解るなら、それだけでお前に對する十分な刑罰なんだ。我々にとつては死よりも恐ろしい事に思はれるからな」

「さうです」と彼女は口を入れた。

「それは眞實に恐ろしい事です」

守備兵は門を開けて彼女を町から放してやつた。

暫くの間彼等は門を離れて息子のために血を浴せかけられ、濕つ

てゐる生地に道を分けて行く彼女の後姿を見送つてゐた。彼女は泥地の中を痛ましげに足を引きづり乍ら緩かに歩いて行つた。彼女は町の防備兵の死の前に頭を垂れ、道に落ちてゐる壊れた武器を大儀さうに蹴り乍ら——生命を保つと云ふ事の中に信仰を持つ母にとつては武器と云ふものは破壊の道具として憎むべきものであつた。

彼女は恰も外套の下に何か液體を入れた壺でも抱いてゐて、それを濡すのを恐れてでもゐるやうに極く注意深く歩いて行つた。彼女の進むまゝに彼女の姿は段々小さく縮まつて行つた。城壁から彼女を見守つてゐた兵士達は今迄自分達を壓してゐた失望的な氣分が彼女と共に薄らいで行く様な氣がした。彼女の姿が半分くらひ縮まつ



た頃であつた。彼女は立ち止つてふと後を振り向くなり暫くの間ちつと城壁をみつめて居るのを守備兵達は見た。

やがて荒れ廢てた野原を横切り敵陣の中へ進み入る彼女に尙も氣を取られてゐた。彼女と同じやうな黒い影が用心深く彼女に近寄つた。

彼等は彼女に近寄るといきなり、彼女が一體何處へ行くのかを尋問した。

「お前さん方の指揮官は私の伴なんだよ」彼女が言ひ放つた。兵卒共は一人も彼女の言葉に疑ひを挟まなかつた。彼等は一緒に彼女に付き添ひ自分達の指揮官の勇敢な事、聰明な事を稱讚しながら歩い

た。彼女は皆の言葉にちつと耳を傾けた。そして誇らしげに頭を上げて尤もだと云ふ様な風を示してゐた。彼女の息子は如何にもさうあるべき筈なのだ――

やがて彼女は一人の男の前に立ち止つた。その男こそ彼女はその男の生れる九ヶ月以前から知つてゐたのだ。彼女は今迄一瞬間も自分の心から彼も失つた事がなかつた。そして彼も彼女の前に立ちはばかつた。絹と天鵝絨の服を身に纏ひ、寶石を鏤めた劍を腰に帯てゐる。總ての物が長い間夢の中で彼女が幻しのやうに偲ひ浮べてゐた息子そのものであつた。……美々として氣高い愛すべき！

「お母さん！」と彼は言つて彼女の手に接吻をした。



「お母さん来ましたね。よく来て呉れました、明日はこの呪はれた町を攻撃するんです」

「その中でお前は生れたんだね」彼女は彼の事を思ひ返した。

自分の勳功に依つて酔はされ、更に偉大な光榮に對する願望に依つて熱狂してゐる彼は若々しい尊大な誇を湛へて母に語つた。

「私は世界の中に生れたのです。否や全世界のために生れたのです。そして驚愕的にその事實を遂行するのです。——私は只お母さんを救ふために今日までこの町を見逃がして置いたのです。この町を私の足下に壊滅させるのは全く譯もないことです。私の欲するまゝに私の名聲を發揚するのを今日まで喰ひ止めてゐたのはお母

さんを救ひ出したかつたからなんです。然しもう今日か明日かにあの傲慢な人間共の巢を一蹴に附してやりますとも」

「總ての石はお前を知つてゐるのだよ。子供の頃のお前を覚えてゐるのだよ」と彼女は云つた。

「石は黙つてゐます。人間が石を話させる事が出来ないなら、山を話の相手にしてやります。それが私の欲する事なんです。」

「然し人々は？」と彼女は訊ねた。

「おゝさうです。私は皆を憶へてゐます。お母さん、私には彼等が必要なんです。何故つて？、人々の記憶の中に英雄は永久に存在するのですから」



彼女は答へた。

「人生を創造する者が英雄なんだよ。英雄は死を征服するものだね」  
「そんな事はない」と彼は答へた。

「都市を破壊した者は、都市を創造した者と同じに有名なんです。御覧なさい。ローマを建設したイネアスやロメラスを知らない者も、ローマを破壊したアラツクや、その他の英雄の名を知つてゐます」

20

「總ての名は長く残りますね——」と彼女は言ひ放つた。

かうした氣まづさに於いて、彼は日の沈むまで母と話し續けた。彼女はとき／＼彼のたかぶつた話を遮つた。彼の誇りに充ちてゐた

頭は段々首垂れて來た。

母の生産物、彼女の寶である彼が、彼女の前で破壊に就いて話すのは彼女の人生に對する解釋に反對する事であつた。然し息子は自分の母に對する人生の一切の意味を否定してゐる事は氣付かなかつた。

21

母は常に死に反抗してゐる。そして人々の家に死を導く手に對しては總ての母がそれを憎み敵意を持つてゐる。然しその息子はその意味を理解し得なかつた。心を殺す光榮の眩しい輝きになやまされ

てゐた。  
彼は、母と云ふものは自分の生命の所産物であり、寶である子供



の生命に關しては全く野獸の如く、夢中に少しの恐れもなく何んでもやり抜くと云ふ事を知らなかつた。

彼女はぐんにやりと坐つて頭を低く下げた。

指揮官のきらびやかな天幕の開かれた口から、町が眺められた。

其處で彼女は妊娠の苦しみに耐へ、彼女の最初の子供の出産に藻掻いた。然もその子供には、たゞその町を破壊すると云ふのが唯一の願望なのだ。

太陽の紫色の放射線は町の城壁や塔を血に染めてゐる。窓は不吉な輝を放つてゐる。

町全體が傷つき、その無数の傷口から生命の赤い血が迸つて流れ

てゐるやうだ。

時は過ぎ行く。町は一つの屍のやうに黒づんで行く。葬式の灯のやうな星が其の上に瞬き初めた。

彼女は心の眼を開いて暗い家を見つめた。人々は敵の侵襲を恐れ、灯をつけるのを避けてゐる。そして屍の臭氣の溢れた通を想ひ浮べた。死を待つ人々のおどおどしたさゝやき——彼女は一切を見た。彼女に對して生地の親しい者の一切が彼女の前に浮き上り、靜かに彼女の決心を待つてゐる。彼女は自分が生地のあらゆる人々の母であること云ふ考へを強く感じた。

暗い山頂から雲が谷間へ沈んで行つた。そして翼のやうに打ち濕



つた町の上へ飛び擴つた。

「たぶん、私達は今夜攻撃を開始するでせう」と彼女の息子は言つた。

「若し今夜、眞暗闇だつたらね——太陽の光が人の眼に見える時、人を殺すのは骨が折れますよ。武器の閃きで眼が盲みますからね——恐ろしい打撃を見舞つてやるのだ。」彼はかう言ひ乍ら自分の長劍を調べてゐた。

「茲へお出で」と彼の母は言つた。「私の胸の上へ、お前の頭を置いて、暫く静かに落ち付いて御覽、そしてお前が子供であつた頃の幸福と静穩さを思浮べて御覽。皆お前を可愛がつてゐたのにね」

彼は素直に彼女の側に坐つて臉を閉ぢ乍ら言つた。

「お母さんは私を生んで呉れたものですからね」

「そして女は？」と彼女は彼の上に身をかゝめながら訊ねた。

「女はいくら居ても總て甘い物にすぐ飽きが來る様に飽きて了ひます」

彼女は最後に言つた。

「お前は子供を持ちたくはないかへ？」

「何故です？殺させるためですか。誰か私の様な者が出て來て皆な殺されて了ひます。私にとつては悲しい事です。それに復讐しようにも私はもう年を取り過ぎ疲れ過ぎて了ふでせふからね」



「お前は優しいんだね。だがお前は電光のやうに鋭いんだもの」と  
彼女はさう言つて溜息を洩した。

彼は微笑み乍ら答へた。

「さうです。稻妻の様に……」

彼はそこで彼女の胸に埋まつて子供のやうな眠りに落ちた。

彼女は黒い袢帯で彼の身を掩ふや、彼の胸に短剣を突刺した。彼は一聲喚いたが、そのまま死んで了つた。

母である彼女は彼の心臓の場所を知つてゐた。彼女は驚異に打たれてゐる兵士達の足下へ彼女の膝から屍をはねのけて、町を指差して言つた。

「私は一市民として、私の生地に対して、私の出来る凡てを果しました。私は一個の母として私の息子と一緒にいるのです。私は他に自分の生命を継がせるにはもう年を取りすぎてゐます。私の生命はもう誰にも用がなくなりました」

一つの短剣は彼の血！そして彼女の血を以つて暖められた。——  
彼女は自らの胸に短剣を貫通した。

人の心が痛む時、それを誤たずに貫通す事は容易な事である。



人間とシンプロン



## 人間ミシンプロン

藍色の湖水は永劫の雪を頂いた山中に底深く静まつてゐる。薄暗い網状の花圃がその水際近くまで美しく伏起して、砂糖の塊に似た白塗の建物が岸邊から湖水の中を覗込んでゐる。邊一帶が小兒の睡眠の様に静穩で平和だ。

朝だ。花の薫が山からゆるやかに漂つて来る。太陽が復活し、木の葉や花瓣の上に朝露が煌く。灰色のリボンの様な細道が寂然とした山の谷間へ入り込んでゐる。——小石がごろついでゐる道なのだが、誰れでも一寸觸つて見たくなる程まるで天鵞絨の様に滑かに見



へる。

うづ高く積み上げた石塊の側に、何んだかどす黒い甲蟲みたいな一人の工夫が蹲つてゐるが彼の胸には一つの記章が輝いてゐる。彼の貌は豪然と峻しくそれで優味が溢れてゐる。彼は日に焼けた両手を膝の上で組み合せ、栗の樹陰に立ち留つてゐる旅人の顔をしげしげ見上げ乍ら話し掛けた。

「お前さん、此處はシンブロン山ですよ、そして此れがシンブロン穴道で労働してゐる者の記章なんですせ」

工夫は瞳を胸へ落とし輝く記章を見詰めながら無邪氣に微笑んだ。

「オ、何麼仕事でも慣れない中は骨の折れるもんでさ、それでも

仕事つてもものはぢきに慣れて樂になれるもんでさね。だが思へば私達のは随分難儀な仕事でしたよ！」  
工夫は頭を軽くうちふり太陽を仰いで微笑んだ、そして突然、腕を振り廻した。彼の眞黒な瞳が輝いた。

「私は折々怖しく思ひましたよ。大地には何か生靈があるんぢやないでせうか、お前さんは其麼風に考へませんか？私達が山の裡を深く抉り抜いて山に傷を負はせた時でさ、大地は恐ろしく狂ひたちましたよ。大地は、私達の心臓の鼓動を止め、頭をぐらつかせ、骨を溶ろかす様な熱した息を吐きかけました。何遍も其麼目に逢つたんですせ。そして其の母の大地は自分の子供たる岩石を



私達の頭から撒き散らし、熱い水を浴せかける。さあ、そりや眞實に恐ろしいこつてさね、お前さん——時とすると松明の焰でその水が眞亦に染まつて見えるんです。私の親父は此麼ことを云ひましたつけ、俺達が大地を傷けたので大地が自分の血で俺達を溺らせ、焦き殺さうとするのだ——」

「今に見てゐろ——」

そんな事は全くの迷信なんです、でもじめじめして息が窒りそうな闇の中で水をちやぶく跳飛ばし乍ら鶴嘴で岩を碎き割つてゐる時なぞに、此麼言葉を聞かされると妙に迷信だかなんだか解らなくなつちまひますからね、何故つて、お前さん其處ちや凡て

が迷信的なんですもの。人間は此麼に小ぼけで、山は空にまでも届く程大きい、その人間がその山の横腹へ穴を抉らうとしてゐる。眞實の事を知るには現場にぶつかつて見なきや解りませんよ。小ぼけな人間の私達が抉り抜いた暗黒な穴の中を見なきや駄目です。

私達の道具、山の物凄い容貌を見、穴の中の陰氣な響、狂人の病的な笑聲みたいな爆發の轟を聞かなけりや解りませんよ、私達は黄昏に穴の中へ這入こんで行つたんです、私達が太陽と別れて大地の底へ行く時、太陽はどんなに悲し氣に私達を見送つたこととせう——」



工夫は両手をちつと見詰めてから記章を淺黄色の作業服の上にかちんと置きなほして溜息を洩した。

「人間はどうしたら仕事を成遂げられるかといふことを知つてゐますかね」彼は誇らしげに續けた。

「ね、お前さん、小ぼけな人間でも、ものを仕遂げやうと決心する時は限りない力が湧くんです——確かにさうですよ、人間は成爲したいと思ふことはなんでも屹度終には仕遂げて仕舞ひまさ、私の親父は初にそれを信じなかつたんです、親父は云ひました。

『山を掘貫いて國と國とを續けるなんぞは神様の御意志に逆ふと云ふものだ、神様は山の壁で國國を分けてゐらつしやる、マド

ンナ様は俺達の味方をして下さらないといふことはお前にも解るだらうよ——』

年寄つた親父は誤解してゐたんです。でも其後親父も矢張り人間の方が山よりも偉大で強いものだと感じて、今私が思ひ、お前さんに話してる様なことを考へ始めたんです。

ところがある休の日のことでしたね、酒樽を前にしてテーブルの周圍に仲間の者達が腰を卸した時、親父は此麼ことを曰ひました。

「神の子達——それは親父のお氣に入りの言葉でしたが、何しろ親父は優しい善良な男でしたから——」



神の子達、お前達は、さうやつて大地と争ふもんぢやないせ、大地は負はされた傷に對して復讐をせずには居まいからな、それに人間が大地を征服するなんてことは所詮出來つこないんだから——いまに見てゐろ、俺達が掘り込んで行つて山の真中へぶつかる時には大地は屹度俺達に火を吐きかけるから、何故つて、大地の真中は火だものよ、——そんなことは誰だつて知つてゐる。御覽。俺達が山を掘つて行けば行く程空氣が熱して息苦しくなるぢやないか」

工夫は淋しく笑つた。そして両手で髭の先端を弄つた。

「其麼風に考へてたのは親父許りぢやないんです。それに親父の云

ふことは實際だつたのですからね、私達が穴道の内へ段々深く這入りこんで行くと、空氣は火照り出す、仲間の者達は疲勞れて衰弱り始める、其の中にルガノから稼ぎに來てゐた二人の奴は氣が狂ふといふ始末なんでせう、茲なんぞ、小屋の中ちや仲間の者が多勢、魔されてでもゐる様にわめき立てたり呻つたりする、中には脅されて寢床から跳上る奴もゐたんです。」

「俺の考へは正しくないのかな？」

親父は不安氣な眼付をしてこふ云ふのです、そして咳をせいで段々瘦せ細つて行つたんです。

「俺の考へは正しくないのかな？ 大地は征服されてるものか。」



とうとう病床とこにつきましたかね親父は非常に強い人間でした。三週間以上も自分の価値を自覺してゐる人間の様に死に對して勇敢に争ひましたが、不平なんか決して漏らしませんでしたよ。

「俺の仕事は終つた。パオロよ」と、親父は或夜私に云ひました。「氣をつけて家へ戻りな、そしてマドンナ様にお縫すりするんだぞ」そこで親父は長い間、両手に顔を埋め、息を殺して沈黙に耽つてゐました。

工夫はつと立ち上つて山を見上げた。そして筋肉がはち切れさうになる程體中に力を込めて手足を伸ばした。

「親父は私の手を取り自分の側近く私を引き寄せて云ひました。そ

れは眞實まっくの眞理ですぜ、お前さん——

「パオロ、俺は何にしろ出来ると思はれるのだ、な、倅よ、俺達と向側から掘つて来る者と山の裡で出逢ふとお前は信じるかい？」

私は出来ると思つてゐたんです。

「そうだ、お前は信じなきやいけないぞ、何事でも幸福な結果と、マドンナ様を祈る善良な人間をお助け下さる神様を確く信じて爲なさなきやいけないのだ。倅、俺はお前に頼んで置く、若しも山の裡で出合つたら俺の墓へ来て「親父さん出来ました」と報しせて呉れよ、それで俺は解るんだ」



寔まことにその通りでさね、お前さん、私は親父に約束しましたよ、それから五日の後に親父は死んで逝きましたが、死ぬる二日前でした、俺の屍は穴道の中の、俺が最後まで働いてた場所に葬埋うづめて呉れと私に願うんです、そしてお祈いのり禱たごをやりましたが、私には親父が氣が狂つてゐる様に見へたんです。

親父が死んで恰度十二週間目でしたよ。私達は反對側の方から掘つて來た者と山の裡で出合たんです——その日は宛然まろて狂亂しさうな日でしたよ！お、私達が暗い大地の中で、他の工夫のどよめきを耳にした時——ね、お解りでせう、お前さん。私達ちつぽけな人間を壓潰しさうな重い大地の下で、そりや全く突然に聞えた

んですからね——

數日間私達はガン／＼云ふ響きを聞きました、その響が日毎に高く明瞭になつて來た時、私達は勝利者の狂的な歡喜よろこびに戰慄おのかすにはゐられませんでしたよ。——私達は肉體の無い人間みたいに疲勞も感せず惡鬼の様になり誰の指圖もまたずに労働き拔きました。——眞實ほんとうに宛然まろて酩酊よひどた日の舞踏の様ように愉快でした。

私達は誰も彼も子供の様にお互に善良で親切になりました。お、若しお前さんに、數ヶ月もモグラみたいに大地の下を掘り廻つてゐた人間が、闇の中で同じ人間に會ひたいと云ふ欲求が、どんなに強烈で、熱情的であるかが察しられるならね！



工夫の顔は輝きに溢れた。彼は聴手の方へ迫寄つて深い優しい眼で聴手の顔を見やつて、静かに嬉しげに續けた。

「そして最後の土壁がとう／＼崩れ落ちて、其の開いた穴に松明の赤い焰と感喜よろこびの涙に浸つた黒い顔がそれからそれと澤山に浮び上つた時には——勝利と、感喜よろこびの叫びが響き亘りました。……その日こそ私の一生涯の中で一番幸福な日でした、その時のことを想ふと自分の生きてゐたことが無駄でなかつたと感じますよ！仕事、私の仕事は神聖な仕事でした、ね、お前さん！……そうです私は征服した山に接吻キッスした、大地に接吻してやりました——その日はたまらなく大地が懐しかつた、私は女のように大地が戀しく

感じられたんでさ、お前さん！

無論私は親父の墓へ行きました！死人が聴かれるかどうか解りはしません。私は行つたんです。私達と一緒にはたら労働き同じに苦勞した者の望みは尊重しなけりやいけませんね？

そふです、そうです、私は親父の墓に行き兩足で大地を敲いて、彼の遺言通りに叫びました。

「親父さん、出来上つた！人間が大地を征服した、出来上つた、親父さん！」



書かれざる曲



## 書かれざる曲

或る若い音楽家が、暗い瞳を、ちつと遙か彼方の物に据えながら、口早くちはやに呟いた。

「此れを作曲したいがな。」

大きな町へ續いた一筋道を一人の少年が歩いてゐる。其の町は蹲うつくまつてゐる。建物の重い塊が地上を押し付けてゐる。そして町は呻うめきたてたり喚れめき聲を揚げてゐる。遠くから眺めると、町は、未だ沈み切れない夕陽の血のやうに眞赤な焰まかほを浴びて燃えたち、寺院の十字架や尖塔や、風見は血みどろに染つてゐる。



黒雲の端の方も亦火に焼けてゐる。高い建物の角張つた屋根は、深い傷のために赤く滲んだ様な組合せ細工のガラス窓が彼方此方に輝いてゐる中に、何物かを暗示する様にぐつと聳えてゐる。打延された町は、苦しみに疲れ切つてゐる。幸福の後の息も吐かせぬ争闘の光景——死に迫つた懊惱、そして暖たかい血は黄ばんだ水氣となり死滅して行く。

少年は歩き續ける。幅廣のリボンに似た道は、重なり合つた微光に浸されて、野原の中へ路を分けてゐる。

其の道は、一本の長劍が見えなり力強い手で刺し込まれた様に、其の町の一面に喰ひ込んでゐる。道傍の並木は一樣に、たち消えた

松明の様に、沈黙つた大地の上に其の大きな黒い頭をぢつと擡げてゐる。

空は一面雲がかゝつて、星は姿を隠してゐる。目に映るものは何んにもない。

夜の世界へ迫り行く夕暮は、全く物悲しげに静寂で、ひつそりした少年の軽やかな一步一步は、靄の中に寝りに落ちる疲れた野原の寂寥さを破る。

少年は尙も進み行く。

沈黙の夜は、少年に追ひ縋り、やがて黒い外套の中に少年を抱き込む、靄は段々深くなり、地上に優しく沈む赤や白の館を其の抱擁



の中に秘め込んだ。木々の茂つた花園も、小山の上に寂しくたつた孤兒の様な樹木の葉も、その中に隠されて了ひ、煙筒も姿を消す。一切の物が黒すみ消え失せて夜の闇の中に吸ひ込まれて了つた。其の小さい姿は恰度何か不思議な恐怖にかられてでもゐる様に、手に一本の杖を握つて静かに進んで行く。

少年は黙したまゝ、少しも急がず、ちつと街に眼を据えて尙も行く。

少年は一人ぼつねんと、妙な、小さい様姿をしてゐるが、彼は、町中の人が久しい間待ち望んでゐた或物を持つてゐる様にも見受けられる。青、黄、赤の燈火は、少年を歓迎する様に目早く煌き出し

た。

太陽は全く沈んだ。十字架も、風見も、尖塔も、融けて消え去せた。町は段々小さく澱んで、黙した大地を更に押し付ける。町の上空には蛋白石に似た雲や怪氣な雲が搖き乍ら段々大きく擴つて行く。燐光を發する黄色の霧は凝集して家の灰色が、つた網の上にぎざ／＼に被さつてゐる。

街は火を燃やしつくして了つたかの様に、赤々とした煙を吐いてゐる——屋根や扉の途切れた線は、何か魔術的な、怪氣な、然も充たされない完成されない何物かを現はしてゐた、宛然人間のために此の大きな町を造つた者が急に疲れだして眠りに落ち、又は信仰を



失ひ、失望しきつて一切のものを投げ棄てて、死に向つてゐる様だ。

然も此の町は生きてゐる。そして己を美しく見せたいと云ふ氣苦勞氣な期待を持つてゐる。そして太陽の前に誇らし氣にのび上る。幸福に對する熱狂的な要求に喚きたてる。生き様とする熱情的な意志に刺激される。沈みかゝつた響きの波は、再び圍まれた野の薄暗い沈黙を破つて響き渡る。空を蔽ふ黒い半球はにぶい弱い光に充ちて來る。

少年は立ち止まつた。

頭を擡げて手を振つた。そして確りと前方を凝視めてすた／＼歩

き出した。

夜は少年の後を追ひながら、母の聲の様な優しさで言ふ。

「倅よ。お前の急ぐ時は今だよ！あの人達が待つてゐるよ。」

「こりや、とても、此の事はかけない。」と若い音楽家は思案氣な微笑を洩し乍ら獨言した。

暫くの沈黙の後、音楽家は手を舉げ、物たりなげなそして嬉しげな調子で付け加へた。

「純眞な處女のマリイよ。」

少年を待つてゐるのは何か？」



太陽と海



## 太陽と海

太陽は藍色の眞晝の空に溶<sup>と</sup>ろり、熱い、色調に富んだ光線を海上と地上に注ぎかけてゐる。海は微<sup>まどろ</sup>睡んで乳色の霧を吐き蒼味を帯びた水は刃金のやうに煌めく。鹽水の強い香が寂しい濱邊へ運ばれて来る。波は打ち寄せては灰色の巖の塊にぶつかり物<sup>もの</sup>憂げに飛び散る。又は静かに汀を這ひまはつては小石をざはめかす。硝子のやうに澄んで泡も立たない穏かな波である。

山は熱い紫色の霞に包まれ橄欖<sup>オリーブ</sup>樹の灰色の葉は太陽の光線の中に古銀のやうに輝いてゐる。山腹を蔽ふ花圃にはレモンや密柑の黄金



が暗い天鷲絨ビロウに似た繁みの中に煌めき、柘榴の赤い花が朗らかに微笑んでゐる。何所も彼處も花だ。

なんと太陽は地球を愛することよ！

巖の上に二人の漁夫がゐる。一人は麥藁帽子を被つた爺さんである。彼は重苦しい顔つきをして頬にも顎にも上唇にも灰色の薄毛がもや／＼にのびてゐる。彼の眼は脂ぎつた肉塊の中に落ち窪み鼻は赤く手は日に焼けてゐる。彼はみすばらしい釣竿をはるかに海へ抛りこみ、巖の上へ腰を下して毛脛を青い水の上にぶらさげてゐる。波はざつと寄せてはそれを洗ふ、その度に黒い踵から澄んだ重い雫が海へ落ち込む。

爺さんの後には痩せこけた茶色がかつた黒い眼の男が巖に片腕をもたらせながら立つてゐる。頭には赤い帽子がのつかり白い肌着ジャルシーが逞しい胸を包み青い洋袴ズボンは膝までまくり上げられてゐる。彼は右手で口髭をひねりながら何か物思ひに耽り氣に凝乎と海を瞞めてゐる。

沖合には漁船が黒い筋をなして動いてゐる、その遙か彼方には白帆かすかが幽に見える。白帆は動かない、そして太陽の中に雲のやうに溶け込みさうだ。

「その女は金持の奥さんなのかい？」爺さんは無理に膝を組み重ねやうとしながら皺唄れ聲で訊いた。



若い男は静かに答へた。

「そうらしかつたよ。飾針ブローチも有つてゐたし、海のやうに青い大きな石の入つた耳環や澤山の指環、それに時計も有つてゐた。……亞米利加人のやうだつたな。」

「美しいのか？」

「さうよ！そりや細そりとしてゐてな。なにしろ眼が素的なんだ。

まるで花みたいでよ、それに可愛いほんのりと開いた口つて、あんなのお前知つてるのかい」

「そりや、正直な一生に一度しか戀をしないつて女の口だな」

「俺もそんな氣がしたよ」

爺さんは竿を引き上げ瞥つと針を見つめて眼を瞬いた。そこで笑ひながら呟いた。

「これで魚も馬鹿ぢやないな、それ！」

「誰れが眞晝間、釣なんかするんだい」若い男は蹲みながら訊いた。

「俺だな」爺さんは新規に餌をつけながら答へた。そして糸を遠く海へ投げ込んでから訊きかへした。

「朝までその女を漕いでやつてたといふんだな？」

「濱へ上つた時太陽が恰度昇りかけてゐたよ」若い男は答へるなり深い歎息をもらした。

「二十リラだつて？」



「そうだ」

「もつと貰へたかも知れねえな」

「もちつと呉れたかも知れないね」

「お前女と何を喋り込んだい？」

若い男は惱ましげに顔を蹙<sup>しか</sup>め悄然と首垂れた。

「女は言葉を十許りつか知らないんだ、仕方がないから俺達は黙つてゐたよ」

「眞實の戀つてもものはな」と爺さんは云つて後を振り向き、丈夫な齒を大きな笑の中に現はしながら

「電光みたいに心をついて、そして電光みたいに黙り込んでゐるも

のさ。そうだらふ」

若い男は大きな石ころを拾ひ、海へ抛り込まうとしてゐたがこう云ひながら肩越に後へ抛りなげて了つた。

「言葉が異つてゐちや人の欲してゐることが解らないこともあるからな」

「そうばかりも言へないせ」と爺さんは一寸考へた後で言つた。青い海面に遙か乳色の霧の中を白い汽船が雲の影のやうに音もなく漕つて行く。

「シンリイ通ひだな」爺さんは汽船の方をシャクリながら言つた。何所からともなく彼は長い苦茶苦茶な黒い巻煙草を取出して、それ



を二つにちぎつて半分を肩越しに若い男に渡しながら訊いた。――

「お前、その女と一所に座つた時どんなことを考へたい？」

「人間と云ふ者はいつも幸福つてことを考へてた」

「お人好しだからな」と冷かに爺さんは口を挿んだ。彼等は煙草をふかし始めた。紫草の煙の渦は豊饒な土と静穏な水の香に染まつて、じつと、そよぎもない空氣の中に静まつて居る岩へまつはりついた。

「俺が女に歌つてやつたら女は笑つてたよ」

「えゝ？」

「でも、お前は、俺が歌の下手つてことは知つてらな」

「う、知つてるとも」

「そこで俺はオールを休めて女を見つめてやつた」

「あは！」

「俺りや見つめたんだ。俺は獨言した。此處に若くて強い俺が居る。それだのにお前さんは思ひ沈んでゐる。俺を愛し俺を幸福にして呉れ。」

「女は寂しがつてゐたのかい？」

「貧乏でもない奴だ。楽しいのならなんで外國へなんか行くものか？」

「そうだな」



「お前さんには親切のありつたけを盡し、俺達二人の近くに暮す者を皆な幸福にしてやると俺は聖母マリア様の名によつて誓つたんだ——此れは俺一人で考へた文句だせ」

「なるほど、なるほど」と爺さんは叫んだ。そしてぐるりと大きな頭を振り向けて高い太い聲で笑ひ出した。

「俺はお前さんに、本當に眞實を盡すがな」

「うふん」

「でなければと——俺は考へた——鳥渡の間一所に暮さうちやありませんか、俺はお前さんの心ゆくまでお前さんを愛して上げますよ。そこでお前さんが、小船と綱具と地面の料金しるがねに少し許りの金

を呉れば俺は戀しい國へ歸つて一生涯お前さんのことを忘れずに親切に思つてゐるがな」

「そりや面白いな」

「やがて——明け方近くなると——俺はもう何も入らない、金なんか欲しくない、たい、彼の女だ。たとへ一晚だつて好いと云ふ様な氣が起つたよ」

「少しあつけないね」

「只つた一晚だけのこつた」

「ふん、ふん」と爺さんはうなづいた。

「ビエテロの伯父ご、だが、俺には小さい幸福こそいつでも一層眞



實だと思へるんだよ」

爺さんは押し黙つたなり厚<sup>あつ</sup>ぼつたい唇を閉ちて、ただ、じつと青い水に見入つてゐる。

「おゝ太陽よ！」

「そうだ、そうだ」爺さんは突然頭を振りながら言つた「小さい幸福は一層眞實だ。然し大きな幸福も一層いゝな、貧乏人は見かけは好いが金持は強いからな、そりや、いつもそうだぜ」

波はゆらくして飛び散る。紫の煙草の渦はニンフの神のやうに二人の男の頭上に漾ふ。若い男は立ち上つて煙草を口の隅にくわえて静かに歌ふ。

彼は岩の灰色した側へ肩をよりかけ胸に腕を組み、夢みるやうな眼をして海を眺みながら。然し爺さんは動かない頭を胸にうづめて居睡を始めたらしい。

山の紫色の陰影は暫々濃く軟かくなつて行く。

「おゝ太陽よ！」と若い男は歌ふ。

「太陽よ、

限りもなく美しき太陽よ！

お前の光に浸して呉れ、

おゝ太陽よ！

お前の生命で充たしてお呉れ！」



緑の波は楽しげに笑ひざはめく。

戀人の愛



## 戀人の愛

ローマとジエノアの間に存在する或る小さい停車場で車掌が戸口ドアーを開けた。そして煤すすにまみれてゐる火夫と力を合せて、一人の丈の低い片目の老人を運ぶ様にして階段を昇り、私達の中へ助け入れた。「老耄おいはし！」と二色の聲が一つに響き、人の好い笑ひがそれに續いた。

ところが其の老人としよりは返つて大變元氣に充ちてゐた。皺だらけの手で滑稽な手振をしながら助けて呉れた二人に禮を述べてから、勿體ぶつた科を作つて白毛頭からポロ／＼の垢染み抜いた帽子を持ち上



げ、そこでギョロツと座席をねめ廻して云つた。

「容れてお呉んなせえ！」

彼はすぐ席を譲られた。すると彼は緑色の亞麻織リンネルの衣服を正して安堵の息を一息ついて、肉の落ちた膝頭に手を置いて心持よさうな微笑を、齒の溢れ抜けた唇を開いて洩した。

「遠方へお出かけかね、え、叔父さん？」私の連が訊ねかけた。

「なに、三つ目の驛までっすよ」老人は答へた。「私は娘の婚禮へ行きますのだ」

聽て老人は滔々と止めどもなく喋り出した。列車の輪軌ワギの響よりも喧しい音調で、軌道を揺がせる様に又は風の吹き荒む日に樹の枝

を腕うでり取る様な烈しきで私達に話し出した。

「俺わしはリグリア人だがな、元來リグリアは強壯な人民だ。御覽、俺わしなんか三人の伴と四人の娘兒を有つてゐる。孫ときたらごちや〜居て數へ切へない程だ、婚禮するのは二番目の奴だが、其奴は仲々の綺緻良しだよ。まつたくですよ」

彼は譯はないが晴々して瞳をして四週を慢らしげに見廻した。そしてさゝやかに微笑んで話し續けた。

「俺わしはなんと多衆おほぜいの人民を俺わしの國や王様に捧げたことでせうよ！」

「俺わしの眼を何故どうして潰したのか？お、そりや随分久しい以前の話しでさ。俺わしがまだ、から小供の頃でしたよ、だがね、俺わしはその時



分にやもう親父の片腕になつて働いてゐたんでさ。親父が丁度葡萄畑で石を掘り出しゐた時でしたよ。俺等の土地は無茶に堅いで懸命にやらなきやならねんでさ、そこにや無数の石がごろついでゐるのでね。ところが一つの石が親父の鶴嘴の尖から跳上つて俺の眼に打つかたんでさ痛は感じられなかつたが晝飯の時、俺の眼玉がむく／＼腫れ上つて來た——氣味が悪るかつたよ、お前さん！皆して按み込んで呉れてね、俺に少しの焼きたてのパンを呉れたが眼はとうとうつぶれて了つたんでさ。」

老人は赤銅色に焦げ落ちた頬を擦つて、氣輕に笑つた。

「其の當時にや滅多に醫者なんかも近所にはゐやしなかつた、人間

は智慧がないしな。なあ！皆さん、人間は親切だつたと思ひかね？まあ親切だつたね。」

そして、今は、皺くちやの顔の中に窪み込んでゐる枯死した一つの瞳みは蒼白く灰色がかつて半分禿げ落ちた頭髮の先きで蔽はれてゐる。

「人間は俺の様に永く生きてゐると人間と云ふものに就いて妙な話しをするもんですね、さうちやありませんか？」

彼は何者かを威脅する様に薄黒い歪んだ指を意味あり氣に上げた。

「皆さん、俺は皆さんに人のことに就いて話しませうよ。」



俺の親父が死んだ時——俺が十三の時だった——今でさへ俺はこんな小ぼけな體なんだからね。それでも俺は働くことにや馴れてゐたから、ちつとも仕事に疲れるなんてことはなかつたよ（俺は親父にすつかり仕入れてゐからね）——俺の家や田地は借金で代として賣扱はれて了つた。だから、たつた一つの眼と二本の腕で俺は死物狂ひで働けるだけ働いて暮して行つたんだ。そりや全く苦しかつた。然しな、若者は仕事を恐れやしないさうでせう？俺が十九の時だった、俺は一人の娘に逢つたのさ、ところが縁の神が俺を其奴に惚れさせたもんなんでさ。彼女は俺の様に貧乏だった、然し身體の大變がつしりした丈夫な

女でした。そしてひよろ／＼の阿母おふくろと一緒に暮してゐたので矢張りのべつに稼ぎ抜いてゐたんです。彼女は綺緻は大したものではないが、氣立の優しい如才のない女でね。それに素派らしい善い聲をもち——うん！歌手の様に囀る、俺はそれだけですつかり氣に入つてしまつたんでさ、皆さん——二人が知り合ふ様になつてから俺がさ

「二人で一緒にならうちやねえか」と恚う待ちかけたら。  
「お可笑しいわ、お前さんは片目なんだもの」と彼女の返辭なんぞでせう。

「それに妾もお前さんも何にも持つてやしない如何どして二人が暮し



て行かれて？」

さうです。俺も無一物！彼女も無一物！だが若い者同志の戀にそれが何の關係がありますかへ？戀にや大それた欲なんかあるもんですか、ねえ、皆さん、さうでさね。俺はもう墓地に俺の道を押し通したんでさ。

「さうよ、お前さんは正しいのよ」とアイダの奴もとうとう云ひ出しましたよ。

「若し神様がお前さんと妾が分れ離れに暮してゐる今でさへ二人を守つてゐて下さる位なら、二人が一緒になつて暮す時はなほ樂々と妾達を守つて下さるに違ひないわ」

俺等は結婚すると決めて牧師様の處へ出かけたんです。

「コリヤ危険ですな！」と其の牧師様は云ひなすた。

「イグリアには貧乏人が満ちてゐないかな？悪魔に憑かれた禍の民がね。お前さん達も悪魔の罠に嵌らぬ様に氣を締めんと、お前さん達の貧乏からいつ怖ろしいことが湧くか知れませんぞ」

近所の若い奴等は二人を嘲弄した、年寄達は頭を傾げた。だが其の若者は辛棒強く自分の決めた道を進んだんです。婚禮の日は段々近づきました。二人は前よりも苦しかつた。二人は婚禮の夜を何處へ寝たものかそれさへ當てがつかつた。

「野原へ行きませうよ。」とアイダは云ひましたつけ、



「おいや？神様はあらゆる人に等しい慈をおかけ下さるんだわ。戀は場所なんか何處だつて若い人々はいつも同じ熱情でゐられますもの」私達は野原へ行く<sup>カバレット</sup>と心を決めて了つた。大地を二人の寢床として大空を上掛<sup>カバレット</sup>するとね！こゝで一吋別の話を始めますぞ。よくお聞きなさいよ。これは俺の永い一生涯の中で一番素的な話しなんだからね。

婚禮の前の日の夜明のことでしたよ。俺が雇はれてゐた主人のギオバニ老人がパイプを噛み乍ら冗談語<sup>こと</sup>でも云ふ様に此麼ことを俺に話したんですよ。

「行きな。古い牧場地へ行つて其處を開拓し穀物を播くがいゝぞ。

土地は干びて羊は一年以上も居なかつたがアイダと二人で其處に住まはうつてなら十分開拓の望はあるからよ」  
恁麼譯<sup>いけ</sup>で俺等は一軒の家を構へたんですよ。俺がね働きながら歌を歌つてゐた時でしたよ。大工のコンスタンジオの奴が戸口の中へしよくり突立つて言ふんですよ。

「お前はアイダと一緒に其處で暮して行くのか？どこに寢臺があるんだい？仕事が終つたら俺の家へやつて來な、俺が一つ與るからな。——俺や一つ空いてるのがあるからよ。」

俺がコンスタンジオの家へ押しかけて行つたらね、意地悪者のマリと云ふ神さんが嘔鳴る様に云ひました。



「貧乏者の向見すが夫婦になんかなつて、敷布も枕も何も持つてゐない！お前は本當に馬鹿だよ、片目野郎！お前の女を妾におよこしよ」

すると僕麻質斯と熱で惱んでゐたエトラ、ピアノと云ふ奴が自分の家の門口から聲を張り上げて、お神さんにね。

「其の人に聞いて御覽、お客に澤山、酒が仕度してあるかつて——お互よりももつと皆なを景氣付けることが出来るかつてよ。」

老人は頬の深い皺の中に幸福の涙を輝した。彼は頭を後へ押し曲げて骨張つた喉やぐにや／＼の顔の皮をさすり乍ら靜かに笑つた。彼の腕は絶へず小供の手の様に動いてゐた。

「おゝ、皆さん、皆さん。——彼は微笑み乍ら口を抑へた。婚禮の日の朝にや二人は世帯に入用な物は一式持つてゐましたよ、——マドンナ様の像、土器、亚麻布、勝手道具、俺は神様に誓つた——アイダは泣いたり笑つたりした。すると皆なはお可敷がつて笑つた。——全く人の婚禮の日に泣くつて法はありませんものな。だから皆なは二人を嘲笑たんでさ——

ねえ——皆さん（俺等）と人に言へる様になつた時の嬉しさ、それがどんなだつたかと云ふことは口ぢや言へませんよ。

何か物が（お前さん達）の物であると感じるだけでもたまらなく嬉しいもんでせうね。お前さんに密接な親しいお前さんの連合、遊



びことぢやないお前さんの一生の連合、玩弄物でないお前さんの幸福のための連合、その二人の物であると感じることはね。

近所の奴は皆なして二人を見物に押しかけて來ました、皆な俺等の小屋へやつて來たんです。俺の家はお伽噺にでもある様な立派な家になって了ひました、俺等は凡ての品を揃へてゐた。お酒に水菓子、肉にパン、皆は食つて楽しみ抜いた。な、お前さん、他人に善いことをする位い大きな幸福はあるもんですか。それよりも美しい、愉快たのしいことはない、憚かう俺は信じてゐますよ。

俺等は牧師を招いたんです。牧師様は重々しい。其の席に釣合ふ様な風に話しましたつけ、

「ここにゐらつしやる皆さんは、皆なお前さんのために働いて下さつた、そしてお前さんは皆さんに、一生涯の中で最もお目出たい此の日を祝ふために皆さんに御馳走を振舞ひなすつた。かうするのは本當なんですぞ何故なげかつて皆さんはお前さんのために働きなすつたんだもの、働くことは金銭よりも尊い。働くことは其の働きの報酬として興へられる賃金よりも偉大なるものです。——金銭は消えて無くなるが仕事は残る、皆さんは貧しくとも幸福です。世の中がいくら苦しくとも泣言を云はない、更に苦しみが増しても不平を言はないでせう、お前さんも必要の時にや皆さんの力になるが良い。皆さんの手は喜びにあふれてゐる、皆さんの心は黄



金の様に輝いてゐる。

牧師様は俺わしやアイダやそして皆の衆に御世辭をふりまいてゐた。」

老人は片目で仲間の旅行者を得意氣に見廻した。そして彼が再び口を切つた時彼の眼の中に若々しい元氣な何物かが潜んでゐた。

「皆さんは人間に就いて何か氣付いたでせう！好奇心、どうですか？」

## 信仰と主義



## 信仰と主義

春である。太陽は赫々と輝き、凡ての人が浮々してゐる。舊い石造の家の窓ガラスさへ心地好げな微笑を湛へてゐる。

小さい町の街路に添ふて晴々しい祭日の装ひをした群集が流れてゐる。街中の人があるのだ。労働者、兵隊、商人、僧侶、官吏、漁夫、凡ての人が春の魂に酔ひどれて、宇頂天になつた歡びから或は語り、或は笑ひ、或は歌つてゐる。宛然これ等の人々は生命の甘味に浸された一つの體の様だ。

女の帽子や日傘は美しい色彩の綾をなしてゐる。子供達の掌から



浮び上つてゐる赤や緑の風船球は珍奇<sup>めづかし</sup>い花の様<sup>よう</sup>だ。そして女の子供達、地上の陽氣な公達は、美しい女王様の華麗<sup>きびやか</sup>な上衣に鏤<sup>くわ</sup>めた寶王の様に點々として輝いてゐる。

木々の柔かい緑葉は未だ伸び上らず、美しい幼芽のまゝで、暖かい太陽光を心ゆくまで吸ひつくしてゐる。太陽は遙か彼方で優しく微笑みながら私達を靡<sup>な</sup>いてゐるやうに見える。

其の様子は不幸の中に生きて來た人々にとつて、昨日がそれ等の人々を死ぬ程疲れさせた苦しい傷ましい生活の終りを物語つてゐる様に見える。今日は彼等の凡てが、自分自身に、そして一切の障害を打ち倒す不可抗的な自らの意志に、強いそして清らかな信仰を有

つ學生のやうな崇高な精神に目覺めたのだ。そして今や凡ての者が一緒になつて未來へ勇ましく進行して行く。

この生々ひた人群の中に只一つの物悲しげな顔が目を惹いてゐるのは異様な——全く異様な傷ましい、思ひがけない悲しみだ。丈の高い頑丈な體格をした男で、未だ三十才は越してゐないのに、もう頭髮は白茶けてゐる。其の男は若い女と腕を交へて歩いてゐるのだ。彼は帽子を手に持ち、尖<sup>とが</sup>つた頭髮は銀のように輝いてゐる。瘦せてはゐるがその健康な顔は永久の悲哀を藏してゐるやうに靜かに沈んでゐる。長い睫<sup>まつげ</sup>に蔽はれた大きな黒い眼は、彼が辿つて來た鋭い苦難の路を決して見逃させない、——又、見逃しやうもない——



人の眼である。

「あの二人連れを見給へ」と私の友は私を促した。「變り者だよ。此伊太利の労働者の中で常住演られる劇中の人物さ」  
そこで私の友達は言葉を續けた。

「あの男は社會主義者で地方労働新聞の記者をしてゐるのさ。根は労働者だか書も描んだ。彼はね、科學を一つの宗教として、宗教は又智識を強く刺戟するものだと思へてる——部類の一人なんだ。彼はその上然も優れた反僧主義者でね——それ、黒衣の僧侶が彼を燃えるような眼で見送つてゐるだらう。

五年程以前に彼が宣傳者をやつてゐた頃、自分の團體の中で一人の娘と相識きになつたのだがね、その娘が不圖、彼の心を惹き付けたものなんだ。所で女つてもものは靜に確り信ずることを教ばされてゐる。僧侶達は數世紀の間、女達の心に慙うした信仰の力を養つて、彼等が望んでゐる様に女をして了つてゐるんだ。

誰かカソリック教の教會は、女の胸の上に築かるべきだと云つたが巧く言つたものさ。マドンナの祭式は不信心者が常踏的に行ふやうな、みかけの美しさではない、それは巧みなものだ。マドンナは基督よりも手輕で人間の心に一層近いからね。マドンナには少しの矛盾もない、地獄を以つて脅すやうな眞似はしない——只愛



し、慈み、宥<sup>なだ</sup>すだけだ。——だからマドンナは容易<sup>たやす</sup>く一生涯女の心を囚へることが出来るのさ。

所が、彼が知つた娘は話すこともやれば質問もやる。そして彼女の凡ての質問の中には彼自身の思想と信仰の不足とに對する純朴な驚異が認められた。時として恐怖や憎惡の念さへ目に付いた。

伊太利の宣傳<sup>プロパガンディスト</sup>者は宗教に關して種々意見を述べた、又羅馬法王や僧侶に就いて痛切な言を吐いたんだ。さうした問題に就いて彼が話す時、彼はいつも娘の眼の中に、自分に對して一種反抗的な憎惡の影を見るのが常だつた。そして何か質問の口を彼女が捜むと、その言葉は刺々しく響き、その優しい聲は毒を吐く。慥<sup>たしか</sup>に彼女はカン

リック教と社會主義とは全然相反するものと思ひ込んでゐたのだね。そして此の團體<sup>サークル</sup>内では、彼女の言葉は彼と同様の重きをなしてゐることも慥かなんだ。

元來伊太利は露西亞より女の態度が俗惡で下劣だ。伊太利の女は此の點自ら羞すべきだがね。教會以外の事に就いては少しの興味も持つてゐない、彼等は男の手で成されて行く社會進化の事業なんかには一切門外漢で、其の意味さへ理解出来なかつたんだ。

あの男の自我愛は傷けられ、あの聰明な宣傳者の誇りは娘との衝突によつて損じられた。彼は怒り出し、機嫌を悪くした。漸々娘を巧みに嘲笑したが、娘も彼に應讐した。知らずくの中に彼に尊敬を拂



はせるやうになつてね、彼も娘の加つて居る團體に對してする演説などは注意深く用意してかゝるやうに余儀なくされたものなんだ。それに次いで彼が現在の不都合な状態を語り、何うして人間は壓迫されてゐるのか、人間の肉體及び靈魂が不具にされてゐるのか——そして凡てが外的にも内的にも自由に開放される時の未來に於ける生活の様畫を描く時——彼は娘が全く別人の様になるのを注目したのだ。彼女は人生の鍵の重さを知つてゐる強い伶俐な女の怒りをちつと壓へながら、彼の言葉に耳を澄ましてゐる。それ自身が魔術的に成立つてゐる魂と調和されてる御伽噺を聞かされる、子供の夢中になるまでの熱心さを以つて彼の言葉に聴き惚れてゐる。

此の事は彼を昂奮させたのさ。強敵——一層よい未來の道程にあつて美しい友ともなり、勇敢な闘士ともなることが出来る一人の敵に打克つと云ふ豫想がね。

二人の間の争ひは殆ど二年近くも續いたのさ。別に反抗を欲したわけでもないが、二人は闘つてゐたのだ。終に彼から最初の突撃を試みた。

「あなたは、私の絶えざる反抗者ですね、」と彼は口を切つたのさ。「あなたは、私達二人がもつと親密に知り合へば二人の道も一層利益になるとは思ひませんか？」とね。

彼女は彼の暗示を心地好く感じた。そして殆んど最初の言葉から



二人は烈しく争ふようになった。彼女は教會を、疲れた魂がそこに休息を見出す只一の慰安所として力強く辯護した。そしてマドンナの面前にあつては現世的に差別と見える一切のものも争ふことなく凡ての者が平等であり、同じ憐れな者であると主張したのだ。すると彼は、人間に必要なのは休息ではない争闘だ、市民の平等と云ふものは物質上の平等を抜きにしては不可能だ。と言ひ張つた。

マドンナの衣の蔭に隠されてゐる男には、人々が不幸と暗黒を投げ與へてやる方がためになると答へた。

そこで恚うした争ひが二人の全生活を充たしてね、二人は逢いさへすれば、いつも同一な際限もない熱情的な問題を續けてゐた。日

毎に彼等の信仰の頑固な力は段々著しく成つていつた。

彼にとつては人生と云ふものは、知識を擴張するための、そして又自然力を征服するための一つの争闘であり、人間の意志による神秘的勢力の征服のための争闘であつた。それは凡ての者が此の争闘のめ一濟に武装して立たなければならぬ會戦であり、此の争闘は自由に發して理性——凡ての力の中最も力強い力として自覺的に行爲する世界の只一の力——が勝利を得なければならぬところの争闘であるのだ。

彼女にとつては、人生と云ふものは僧侶のみに解かる法則や目的を決定する理性以上の、ある知られざるものに對する鈍い苦しい懺



牲であつた。

このことのため惱まされた彼は訊ねたのさ。

「あなたはなせ私の演説に出席したのです、社會主義からあなたは何を求めるのですね？」

さうです、私は自分自身に罪を犯し、矛盾してゐることを存じてゐます」彼女は悲しげに告白した。

「でも私は、あなたのお話を伺ふのが楽しみなのですもの、凡ての人間を幸福にされると云ふ夢の様なお話を伺ふのが——」

彼女は勝れて美人と云ふ程ではないが、聰明な顔だちのほつそりした優華な女であつた。そのぱつちりした瞳は穩かにも見えれば怒

つてゐるやうにも見える。優しくも亦慘酷にも見えるのだ。彼女は絹工場に勤めてゐた。そして年寄つた母親と跪の父親とそれから機械學械に通つてゐる妹と一緒に暮してゐたのさ。時折彼女は幸福だつた、少しの亂れもなく全く幸福だつた。彼女は博物館や古い教會堂を好んで、其處にある記念物の繪畫や美術品に熱中するようになったのさ。それ等のものを觀て彼女は云ふのが常だつた。

「恁う云ふ物が個人の家に藏はれてゐて、只一人の人だけが、それを享樂む權利を持つてゐるとは、何と云ふ不思議なことせう！凡ての人が其れを觀るべきだのに！」

彼女は折々此麼風に妙なことを口にしたが、彼にはさうした彼女



の言葉は、彼女の魂の内に潜む、なにか暗い穴から吐かれる様な氣がしたのだ。彼はこの娘が心配と同情に充ちた深い母の愛を有つて、人生をこして、人類を愛してゐるのだと云ふやうに感じたんだ。彼は自分の信實さが、彼女の胸を燃えさせたせその冷靜な愛が熱情に變るまでちつと待つことになつた。

彼には娘が、益々深く注意して自分の話に耳を傾け、内心では自分に同意してゐるやうに思はれたんだね。

彼は古い鍵から、人間を、國民を、一切の人類を解放するため、絶えることない争鬭の必要を熱心に説いた。鍵の鑄は人間の魂に喰ひ込み、人間を盲目にし、悪毒してゐると説いたのだ。

或る日、彼女の家で一緒になつてゐる時、彼は自分が彼の女を愛してゐること、そして自分の妻になつて貰らひたいと望んでゐることを打ち明けたものなんだ。すると彼はこうした自分の言葉が彼女に與へた結果に驚ろかされて了つたのさ。彼女は打ちのめされたやうに蹣跚よろりくなり、眼をぱつと見開いて眞蒼な顔をして跳び上つたのさ。それから壁に凭りかゝつたまゝ、腕を握り、彼の顔を嚇すやうに見つめながら云ふのだ。

「そんなことがあるだらうと云ふことが私の第一の怖れたつたんです。私は大抵感付いてゐました。何故つて、私は永い間、あなたを愛してゐましたから。でも、おゝ、神様！今、何が起りかけてゐる



るのです。」

「あなたと、そして私の幸福な日、一緒に働く日が始まるのです」と彼が叫ぶと、

「否え、」とその娘は頭を振りながら云ふのだ。

「否え。私達は戀に就いて語つてはいけないのです」

「何故ねー」

「あなたは教會の法則に従つて結婚なさるのですか？」

と彼女は靜に訊ねたのだ。

「否や！」

「それでは左様なら」

憊う云つて彼女はすつと彼から歩み去らうとした。彼は彼女をおさへて説き伏せやうとかゝつた。彼女は押し黙つたなり彼の言葉を聞いて終つてから言ふには、

「私も、私の母も、私の父も皆な信者です、そして信者として死ぬでせう。登記場でやる結婚は、私には結婚ではありません。若し子供がさうした結婚で生れたら、その子供は不幸なものになるつてことが私には見えすいてゐます。戀つてものは只だ教會でやる結婚で、神聖なものとなるのですもの、教會だけが人間に平和と幸福を慈むことが出来るのです。」

彼には近い中に彼女が折れるだらうと思はれた。勿論自分が屈す



ることはしなかつたさ。二人は別れた。彼女が彼に左様ならを告げる時彼女は言ひたして、

「私達はお互に苦しみ合はないやうにしませう、ですから、會はふと思つて下さるな。」

でも、若しあなたが行つて了まつたらば——私は出来ません。私は眞實に哀れです。」

「私は約束をしたかありません」と彼は答へた。

二つの強い性格の間に争が始つた。勿論二人は以前に増して繁く會つてゐた。何故つて、お互に愛し合つてゐたんだものね。二人はお互に段々と熱烈になつて行く充たされない戀の惱みに相手が堪へ

られなくなるのを希みながら逢つてゐたのさ。二人の會合は苦痛と絶望に充ちてゐた。間もなく、彼は二人とも疲れ果てて來たことを感じた。

彼女はすると涙に掻き暮れ乍ら僧侶の許へ懺悔に出かけたものなんだ。このことを知つた彼は、坊子頭をした人間の壁が段々頑丈に高くなり、終には超すことの出来ないものとなつて、二人を死ぬまで隔て、了ふやうに想はれたんだ。

或る日曜日のことだつた。二人連立つて街端れの野原を散歩してゐる時だつた、彼は脅す積りぢやないんだ、寧ろ獨言のやうに言つたのだがね。



「わえ、私は時々あなたを殺して了へるような気がするんですよ」  
とき。

彼女は黙つてゐた。

「私は何んて言つたか聞えましたか？」

彼女は愛らしげに彼を見返り乍ら

「イエス」と答えたのだ。

彼は、自分に従ふよりも死ぬ方を彼女が望んでゐることに気が付いたんだね。

然し此の「イエス」と答へられる前に、彼は彼女を抱へて接吻してゐた。彼女は争つたが、その反抗は次第に弱くなつた。そして彼

は何日か、彼女が自分に従ふであらうと云ふ望みを懐かされた。そして彼女の女として本能が、彼女を自分に従はせるために、自分の助となると考へてゐたんだ。

然し今や、彼は勝利は得られない、寧ろ奴隷視されることは感じたので、彼はその日から彼女に女となることを求めなかつた。

斯うして彼は彼女と共に、彼女の生活限界の暗い範圍サークルを彷徨ふやうになつた。彼は出来るだけの手段を盡したが彼女は盲目のやうな微笑を以つて彼の言葉を聞き流してゐた。彼女は何も見なかつた。彼は信じなかつた。

或る時彼女は



「私は、時によると、あなたの仰言ふことはみんな出来るのだと云ふことが解りますの。さう私が思ふのは、私があなを愛してゐるからです。でも解りますが、信じられはしません。どうしても信じることは出来ません。あなたが行つて了はれると、あなたの仰言つた凡てのことも消えて了ふのですもの。」と言ふのだ。

この芝居は二年近くで終つた。その時彼女は健康を損ねて、烈い病氣になつたのだ。彼は自分の仕事を投げ出し、團體の事業にも加はず、病床を見舞つた。友達と逢ふのを避け乍ら彼女の家の周囲を彷徨ふのに時を費した。或は病床の側で彼女を慰めながら看護した。日増しに病症が進んで、熱の炎が彼の女の眼の中に輝き出した。

た。

「人生に就いて、未來に就いてお話しして下さい。」と彼女は彼に訊くのさ。

然し彼の話したのは現在のことだつた。我々を壓迫してゐる凡ゆるものを執念深く數へたてた。それ等のものの一切を相手に、彼は一生涯闘ふことを誓はされてゐる。そして、汚れて、ぼろ／＼になつてゐる襤褸着物を人間が捨て去るために、これ等のものを人間生活から驅逐しなければならぬと語つたのだ。彼女は苦しさに堪へられなくなるまで聞いてゐたが、やがてのこと、彼の手に觸り、懇願するような様姿で彼を遮り乍ら、



「私は、私は死ぬのでせうか？」と訊ねた。

彼は醫者から數日以前に、彼女は肺病になつたので、とても見込みがないことを聽かされてゐたのだ。

彼は頭を垂れたなり答へなかつた。

「私はもうぢきに死ぬつてことが、ちやんと解つてゐます。」と彼女は言ふのだ。

「手を貸して。」そこで差出された彼女の手を取り、彼女は熱した唇にそれを押しあてながら言つた。

「私を忘れて下さい。私はあなたに濟まないことをしました。みんな間違つてゐたのです。私はあなたをお苦しめしました。今はの

際になつて私は、自分の信仰は自分の希望、努力に關係のない只自分が理解されないものに對する恐怖であつたことが解りました。恐怖でした。でもそれは私の血潮の中に宿つてゐたのです。

私はそれと一緒に生れたのです。私は私自身の考へを——又はあなたの考へを持てます。——けれど誰でも心は別々です。

あなたは正しいのです。私は今そのことを知りました、でも私の心はあなたに同意することは出来ません。」とね。

數日の後、彼女は死んだが、彼女が苦しんでる間に彼の頭髮は白く變つて了つた、彼は僅か二十七歳だつたのにさ。

間もなく彼は、その娘の友達で自分の生徒みたいな女と結婚した



のさ。

あれがその二人さ。彼等は墓場へ、死んだ娘の所へ行くんだ。——二人は日曜日毎に墓参りに行つてお墓の上へ花を飾つてゐる。

彼は自分の勝利を信じなかつた。「あなたは正しいのです」と娘が云つたのは自分を慰めるための虚言であつたと彼は思はされた。彼の妻もさう考へてゐる。彼等二人は彼女の想出を慈み尊んでゐるのだ。死んだ善良な女の此の悲しい話は、<sup>エピソード</sup>彼女に報ひようとする欲望で彼等を力づけた。

晴着を着飾つた人々の河は日光の中に流れて行く。楽しげなざさ

めきが、その流れに従つて行く。子供達は騒ぎ廻り、笑ひたつてゐる。凡ての者に喜びも楽しみもないのだ。慥に多くの人の心は暗い悲しみに壓迫され、多くの人の胸は矛盾に苦しんでゐる。然も我々の凡ては絶間なく進み行く。

自由、自由は我等の終局なのだ、我々は尙も元氣を振ひ、一散に進むであらう！



畸  
形  
兒



## 畸形兒

全く暑苦しい日だ。人生は風の凪いだ静かさの中に凝止してゐるやうだ。空は燃へ立つ紅の太陽の澄んだ一つ目を持つて懐し氣に大地を見下してゐる。

海は青色の金屬を滑に打ち延ばしたやうだ。漁夫の、色を塗りたくつた船は半圓を描いてゐる灣の上に蠟付けにされたやうに身搖ぎもしない。灣も上空のやうに澄み切つてゐる。一羽の海鷗が怠るげに羽叩きして飛び去つた。水面の彼方から空へ飛び立つたのよりも白くてすつと美しい鳥がやつて来る。



遠くの方に浮んでゐる霧は太陽の中に浸け込みさうだ。海の中に寂然しんはりしてゐる岩の董菜鳥パイオレットは、ニーボリタン灣でできてゐる指輪の寶石の様だ。

ぎざ／＼だらけの岬を海中へ食出はみしてゐる此の岩島は葡萄やオレンジの薄暗い葉の美しい房や、レモンや無花果やその上可愛らしいオリブの葉の、どんよりした銀色で包まれてゐる。

この緑色の塊の他に赤や白や黄金の花が心地好こちよげに笑ひ乍ら海の方に前倒のめりの懸つてゐる。ところで黄色やオレンジ色の果實は、暑い月夜に暗い空の混めつた大氣の中に輝きらめく星を想はせる。

大空にも、海面にも、人の魂の中にも静寂しじけさが充ちてゐる。人

は立ち棘とげんで一切の生物が彼等の神なる——太陽に無韻の祈りを歌ふのに耳を澄ます。

花園の間には細い小路が曲りくねつてゐる。小路に沿ふて黒色の着物で身を包んだ背の高い一人の女が石から石を渡り乍ら静かに汀に下りて来る。女の着物は日に焼けて色退せてゐる。灰色の汚しみや糞つぎ接つぎまでが遠くから目に付く。頭はむき出しで灰色の髪の毛が銀の様に輝く。広い額、顛顛、黄褐色の頬の皮。縮れた卷毛は什麼櫛でも解きつけられさうもない。

彼女の鋭い凄味を帯んだ顔は一度見たら恐らく忘れる事は出来ない。彼女の變へた顔には何かしらひどく古びた枯れ切つた物が現は



れてゐた。

其の暗い瞳でじつと睨まれると誰でも東方のデホラやジュデイスの燃ゆる様な野人を、つくづく想ひ出させる。頭を自分で編んだ赤い上衣ガイメントの上に傾げてゐる。釦ボタンの鋼鐵はかねが光つてゐる。羊毛の塊が着物あたりの何處かに隠されてゐるのか、赤い毛が胸の邊にはみ出してゐる、路はのめつて歩き憎い、小石は一足毎にごろ／＼轉がる、然し此の灰色の毛の女は足が獨りでに路を見付けて行く事が可能る様に確りと下りて行く。

憊うした話が、彼女に就いて村の人々の中に物語られてゐた。

彼女は寡婦やもめである。夫は漁夫であつたが二人で結婚すると間も無

い事、身重になつた彼女を残し、漁に船出したぎりその儘歸つて來なかつた。

子供が生れた時、彼女は其の子供を隠して了つた。一般の母親が仕たがるやうに街中や太陽の光の中へ子供を連れ出して見せ廻る事を、彼女はしなかつた。襪褌衣で包んで小屋の薄暗い片隅に置き放しにして置いた。隣の人さへ今度生れた子供が什麼子供だか知らない——只だ大きな頭と、黄色な顔の中にむき出した鈍い眼を見ただけである。以前の彼女は丈夫で元氣で愉快で、時に應じて頑固に他人と争ふ事も可能れば又他人を慰める言葉位い使ふ事も知つてゐたのだが、急に近頃黙り込んで了い、常住物案じ氣に眉を頻めてゐる



のが目立ち出した。そして異様な、物足らなさを以つて何か捜し求めてゐる様な面付で、凡ての物を悲しみの霧を透して覗き廻つてゐるやうだ。

皆なが彼女の不幸を知るまでには暫くの時が過ぎた。彼女が子供を隠したのが何故であつたか、彼女を苦しめてゐたのが何んであるか、其れは生れた子供が畸形兒であつた爲だ。

近所の連中は畸形兒の母となるなんかは女の恥辱であると彼女に言つた、マドンナ様以外の者は誰も此の過酷な批難が罪に價するかどうかは知らない、然し子供には罪は無い、彼女が子供を太陽の目から隠したのは誤であつた。

彼女は皆の言葉に従つて子供を見せた。子供の腕と足は魚の鱗の様  
に短かつた。頭はまりのやうにぶく／＼膨れ上つて瘦せた皮ばかりの首の上に危く支られてゐた。そして顔は老人の様に皺だらけであつた。二つの目はどんよりとして大きな口は締なく微笑んでゐる。

人々が子供を見て眉を戚め厭な顔をして物悲しげに立ち去るのを見て彼女は喚き出した。畸形兒の母は大地に平伏し頭を下げたり上げたり仕始めた、そして周囲の人達をみつめ乍ら、誰にも會得出来ないやうな何物かを静かに求めるのであつた。

近所の連中は畸形兒に柩の様な箱を一つ造らへて其の中へ檻樓や



羊の毛を詰め込んだ。彼等は小さい子供を此の柔かな温い巢の中に入れて庭の木蔭に其の箱を置いたのである。幾度となく奇蹟を行ふ力を持つてゐた太陽が此の上、一度の奇蹟を示しはしないかと云ふ神秘的な望を抱き乍ら。

時は過ぎた。大きな頭、痩せた體、哀れな四脚、其れ等には少しの變化も現はれなかつた。只其の微笑の中に食心棒らしい表情が瞭然として來た。そして口には、鋭く曲りくねつた二例びの齒が生え出した。短い骨無しの手はパンの片らを撮んで大きななまぬい口へ其れを運ぶのに熟達して滅多に遣りそこないを仕なくなつた。

子供は啞であつた。だが食物が手近に在る事が解ると嗅ぎ廻るこ

とが出来た。そこで口をもぐぐ演つて顎を動かし大きな頭を振り立てた。どろんとした白眼に赤い血管の網がみなぎつた。

畸形兒の食慾は普外れてゐた、そして時が過つと共に益々烈しくなつて行つた。彼のもぐぐは止みさうにもなかつた。母は倦まず働き詰めたが常住儲はほんの僅かで、時に依ると全く身入りの無い事もあつた。然し彼女は不平がましい泣言は口にしなかつた、又近所の衆に救けて貰ふ事なんかも願はなかつた。そしてびつたり口を黙してゐた。

彼女の留守中に近所の衆は子供のもぐぐに惹き寄せられて庭へ這入り込んでパンや野菜や果物や何んでも食べられる物を片端か



ら常住餓ゑてゐる顎の中へ詰め込んだ。

「此の子はお前さんの持物を皆な食潰して了ひますよ」と近所の人  
が云つた。

「何故、孤兒院か病院へ入れなさないんだね」

子供の母はひんめりとして答へた。

「放棄らかして置いて下さい、私はあの子の親です。私があの子を  
生んだんです、だから私が育てなければなりません」

彼女は美しい顔立の女だつた。で彼女に取り入らうとする男は一  
人や二人ではなかつた。然し誰も手ごたへを得ることは出来なかつ  
た。自分を誰よりも一番深く思ひ込んである一人の男に彼女は此麼

事を云ふのであつた。

「私は貴方と一緒になる事は出来ません、又畸形兒を生むと大變で  
すもの、それこそ、貴方に恥かしい目を見せなければなりません  
から、駄目です、行つて下さい！」

其の男は彼女を納得させ様と骨を折つた。彼は彼女をマドンナの  
様に思つてゐると云つた。マドンナは凡ての者の母である。彼女の  
姉妹として人々は見なすだらと云つた。然し畸形兒の母は言ひたし  
た。

「私に何の罪があるか知りませんが、けれども仕うして此麼に酷く  
苦しめられるのでせう」



男は絶り付く様に願つたり泣いたり、怒つたりし出した、彼女は終いに憊う云ひきつた。

「人は自分で此れは正しいと信じられない事は演れるもんぢやありません。行つて下さい。」

男は何處ともなく旅立つて了つた。彼女は再び男の姿を見なかつた。

そこで數年間、彼女は絶へず動かしては飽く事を知らない口に物を與へてゐた。子供は母の労働の結果、母の血、母の一生までも貧り食つた。

子供の頭は益々大きく異様に物凄くなつて來た。

終にあの瘦せた弱い頸から離れて風船の様に空へ舞ひ昇るかとも疑はれた。部屋の内中彼方此方、頭を打衝けちらすのであんなに成つたのだと想像する人もあるに違ひない。庭の中を覗き込んだ者は一様に何を見たのか自分にも瞭然解らない中に、ぎよつとして足を止め、恐ろしさに震へ上る。

葡萄蔓で蔽はれた壁の傍にある石段の上に一つの箱が据ゑてあつた。其の箱から頭がにゆつと現はれて草の茂つた庭の方へ露出しになつてゐる。

頬骨の突き出た、黄色い雀斑だらけの皺くちやの顔と眼蓋の奥からどろんと見詰めてゐる瞳とは、其れを見た凡ての人の記憶に深い



印象を刻みつける。幅廣の平たい鼻孔がぶる／＼震うてゐる。異様に發育した頬骨と顎は單調に動き、肉の厚い唇は縮りなくだらんとして、不揃な二例の齒が現はれてゐる。獸物の様な大きな突き出した耳は頭から離れてくつ付いてゐる様に見える、そして此の不氣味な顔は黒奴の髪くろんぱの毛に似て、小さく縮れた眞黒な毛の塊で蔽ひかぶされてゐる。

此の畸形兒はとかげの足みたいな小さい手で食物の片々を攫つかんで、鳥の啄む様に頭を前にひよ／＼曲げ乍ら齒で其れを捻ねち取りいそがし氣に噛んだり鼻をならしたりする。腹が一杯になると齒をむき出して笑つてゐる。そして眼を半分死んだ様な顔のだらけた表

情のない鼻柱へ据へる、恚うした彼の動作は死に面した人間が苦悶してビク／＼體を動かすのを連想させる。腹が空いて來ると首を前の方へ伸ばして、赤い唇を開いては薄い蛇の様な舌を動かしてぶつ／＼何か呟やく。二人に近寄る人々は、今迄二人が生き永らへて來たのは何か罪でもあるかの様な氣がして、二人がさうした此迄の罪の生活に嘗めて來た不幸に對して思はず立ち止つて祈を唱へるのであつた。

陰鬱性の鍛冶屋のちいさんは一度ならず言ふには。

「俺は此の子供が何んでも我武茶羅に食ひ散らす口を見ると、俺の力まで終いには食はれて了ひはしないかと云ふ氣が起る。」



人間つて奴は皆な此麼寄生物の爲めに生きたり、死んだりするものだ」と云ふ氣までするのだ。」

此の啞の頭は人の心を押し付ける様な暗い思ひと感じを誰にでも強く起させる。

畸形兒の母は他人の言葉に黙つて耳を傾けてゐた。然し彼女の頭の髪は急に灰色を帯びて來た。顔には皺が寄つて來た。そして永い間笑ふと云ふ事を忘れたものの様になつてゐた。彼女が折々門口に立つたまゝ何か待ち設けてゐる様に眸と空を仰ぎ乍ら夜明しすると云ふ事は他人にも知られてゐた。肩を竦めて人々は噂し合つた。

「一體あの女は何を待つてゐるのかね？」

「あの兒は古い寺院の傍の廣場へでも置けば好いんだ」と近所の人々が彼女を唆かす様に言つた。

「他國の人が其處を通ると、お金を投げて呉れるだらうから。」

母は恐ろし氣に肩を揺振り乍ら云つた。

「見知らぬ人、他國の人に見られたら。まあ思つただけでも恐ろしい、私達を何んと思ふでせう？」  
人々は答へた。

「不幸が何處にでもあるつて事は皆も知つてゐるさね」  
見下げに様に彼女は頭を振つた。然し珍らしい物見たさには何處



へでも出掛け勝ちな他國人が彼女の家へ立ち寄るのは尤もな事である。彼女は家の中から、此等の穀潰し達が口を曲げ目を頻め乍らその顔に嫌厭の表情を浮べ然も面白氣に見てゐるのに目を付けた。又も子供に就いて話し合つてゐる言葉を耳にした。彼女の心は、憎惡に充ちた、明らかに勝ち誇つた蔑視的な數言によつて強どく痛つけられた、彼女の心は殊に憎惡を以つて潜々嘲笑り合つてゐる言葉に惱まされた。記憶するまゝに彼女は外國人の言葉を自ら繰返して見た。彼女の心、イタリヤの女としての、そして母としての心は彼等の侮辱に依つて却つて淨められた。

其の日、彼女は知り合の通辯の所へ出掛けてその言葉の意味を訊

いた。

「言つた者によりますがね！」

彼は肩をひそめて續けた。

「たぶん、イタリヤ人はラテン人種の中で一番先に退化すると云ふ意味でせう。何處で此麼出駄羅目を云ふのを聞いたのです？」

彼女は一言も答へないで出て行つた。

翌日の事であつた。子供は食い過ぎから痙攣を起して死んだ。

彼女は庭の中で箱の近くに坐つて死んだ子供の頭に手を置いた。

尙も靜かに何ものかを待ち抜いてゐる様だつた。彼女の家へ死兒を見舞ひに来る人の目を疑はし氣に彼女はのぞき込んだ。



皆押し黙つて、一言も口を切る者がなかつた。だが一様に彼女を慰めやうとしてゐるらしかつたのは確かだ。——彼女は束縛から逃れたのだ——と慰めの言葉をかけたらしい——彼女は子供を失つたのだ——けれど皆な黙り返つてゐた。時々人々は沈黙すべき時のあることを知つた。

其の後、暫くの間、彼女は尙も何ものかを疑ふ様に人々の顔を見詰めてゐたが。やがて普通の人の様に元の彼女に戻つて了つた。

## 社 會 主 義 者



## 社會主義者

古い葡萄園の、こんもり茂つた葡萄樹に蔽はれた白塗の酒保の扉の前で、朝顔や支那薔薇の入り交つた葡萄の葉蔭の卓上に酒壺を一本置いて、畫家のウキンセンゾと鎖匠のジョヴァンが腰を据えてゐた。畫家は小柄な瘦せぎすな顔色の薄暗い男で、瞳は優しく夢想家らしい微笑に輝いてゐる。鼻の下や頬は剃りたてらしく見えてゐたが其の微笑は宛然で少年の様に若々しく彼を見せてゐた。口は小娘のそのの様に小さく愛苦しい。腕頸も細そりとしてゐて、そのしなやかな指の間には黄色な薔薇の花を挿み、それを唇にあて、ちつと



眼を瞑つてゐる。

「さうだらう。僕は知らないがたぶんさうだらうね」

彼は顛顛のところ落ち窪んでゐる首を振り乍ら静に口を開く。

「さうですとも。全くですよ。北へ行けば行く程人間は不撓ですよ」と頭の大きな黒い縮れ髪をした肩幅の廣い男のジオヴァニイは云ひ張る。彼の顔は赤銅色をして、鼻は日に焼け、一面死肉の白い鱗で蔽れてゐる。眼は牡牛の様に大きく物優しい、左手の指が一本缺けてゐる。物言振は油や鐵屑に汚れた、その手の運びの様にのろ／＼してゐる。爪のそげた黒い指で酒杯を掴みながら太い聲で語り続ける。

「ミラン、トリン——あそこには素派らしい工場がありましてな、人間が新らしくなり、新知識つてやつがどん／＼擴つて來ますよ。世界中が正しく賢くなるのは直きですせ」

「さうだ」と小柄な畫家は言つた。そして酒の中の日光を掴まふとする様にコップを舉げて、歌ふ。

「我等の若き其の時にや、

此の胸烈しく燃えたちぬ！

我等の老ひし其の時にや

時が其の火を消しとめる！」



「北へ行けば行く程、労働者は傑れてゐますよ。例へばね、佛蘭西人なんかは、我等伊太利人のやうに、ごろ／＼した生活はしてゐませんや。もつと行けば獨逸人がゐる。どん詰は露西亞人。貴方は露西亞人が好きでせうねね！」

「勿論ね」

「彼等は自分等の自由や生命を奪ふ權力を恐怖るものも上にないの  
で、ど偉い事業を演らかすのですよ。全東洋が生活の自覺を得た  
のは全く彼等のお蔭でさね。」

「英雄の國だ」恁う言つて畫家は首を傾けた。

「僕はあの連中の間に交つて生活がしたいね」

「貴方が？」鎖匠は拳固で膝を敲いて叫んだ。

「貴方なんか一週間も居たら氷づいて了いますせ」

二人は愉快氣に笑つた。

身邊には藍色や黄金色の花が咲き亂れ、日光は空氣の中に燃えて  
ゐる。酒罍や酒杯の透明な硝子の中に酒が燃えてゐる様だ。遙か彼  
方から海の穏かな囁きが流れて来る。

「さあ、ヅキンセンゾ君」たるんだ微笑を含んで鎖匠は言つた。

「どうして私が社會主義になつたか詩に歌つ呉れませんか。貴方は  
その理由を御存じかね？」

「否や」と畫家は言つた。そして波々と酒を酒杯に注ぎながら、其



の赤い流を眺めて笑ふ。

「君は未だ話さなかつたものね。君の皮膚はまるで生れながらと思はれる様に骨とびつたりしてゐますな」

「私は、貴方にしろ誰にしろと同じ様に裸體はだかで何にも知らずに生れて来たのですよ。私も若い時には金のある嬪をと夢を見てゐたもんです。兵卒になつた頃には士官になる試験にうまく通り抜けたいものと勉強したもんでしたよ。この世の中は萬事不當な事だらけだ、このまゝ白痴ばかのやうに平氣で生活するのは恥辱だと、慙う感じ出したのは私が恰度二十三の時でしたよ。」

書家は肘を卓子に凭もたらせてゐた。そこで頭を持上げて山の方を見

遣つた、斷崖の端には松の巨木が大きな枝をゆすぶり乍ら立つてゐる。

「私達の聯隊が全部ポログナへ送られたんです。其處の百姓が一揆をやつてゐる時でしたよ。彼方では地租を下げろと要求する、此方では勞銀を上げろと喚き立てる、どれもこれも良くない膽言うはごと位に考へられてゐたんです。地租を下げて勞銀を上げる、莫迦な話だ！と私は思ひましたね。——其麼な眞似をすりやあ地主はぶつ潰つぶれた。——と都會に住んでゐた私には、そりや全く無法な話しだと思はれたものなんでしょう。私は無氣に腹が立ちました——一つには暑さのためもあつたんですがね。それで私は彼方此方を引



切りなし駆け廻る、夜は夜で番をする。何故つて連中は御承知の通り地主の所有してゐる機械をぶち壊しにかゝるからでさ。それから穀物を焼き拂ふ、自分達のものでないものは手當り次第に毀損して嬉しがつて居るのです。どうです！」

彼は酒をちよつぱり甜てから益々調子づいて話し続ける。――

「百姓達は羊の様に群をなして、島の周囲をうろついてゐるんです。いつも黙んまりで脅かす様にね。まるでそれを事業の様にしてゐるんですよ。私達は又それを遂ひ散しにかゝるんですが、時には銃劔で威かした事もありますし、たまには銃の臺尻で撲りつけた事もありましたつけ。彼奴等は別に怖わさうな氣振も見せず、

のそく散つて行きますが又直きに集つて了ふ。それは實に法會のやうにぢれつたい仕事で熱のやうに幾日も續くのでさ。リュエオロトオといふ下士官はアブルワジ生れの美しい男でして、自分も百姓でしたが其奴が氣を病んだ擧句、黄ろくなつて瘦せ始めましたがね、一度ならず私達に言ふには「弱つたものだな！發砲でもしなけりやおさまりが附くまいよ！」

との、下士官の泣言が私達を一層惑はしましてね。なにしろあつちの隅からもこつちの隅からも、岡の上からも木の蔭からも百姓の執念深い頭が窺いてゐるのが、ちらついてゐるのでせう。憤怒の眼が私達を射抜くやうに思はれるんです。なせつて、彼奴等は自然



私達に好感は持つてゐなかつたんですもの。」

「飲み給へ」ヴキンセンゾは心から言つて、友達の前へ浪々注いだ酒杯をさしつけた。

「不撓者萬歳！」鎖匠は太い聲で叫んだ。ぐつと酒を飲みほした彼は両手で髪を拭いて語り続ける――

「或る時 私は小さな丘の橄欖の茂みの傍に立つて百姓が伐り倒した樹の番をしてゐました。其の丘の麓には二人の男が働いてゐる、一人は年寄り、一人は青年でしたよ。壕を掘つてゐるんです。恐ろしく暑い日で太陽は火の様に燃えたち、居ても立つてもゐられない様な氣がしました。魚にでも成つて了いたいと云ふ様な日

でしたね、私はむつとしながら二人をねめつけてゐました。正午になると彼等は労働を止めて麩麵と乾酪と酒をとり出した。「え、畜生！」私は腹の中で思つた。すると、今迄私の方を見遣りもしなかつたその年寄が急に青年に何か言ひかける、青年は不同意らしく頭を振りましたが、年寄が「やれよ！」と恚うきつぱり云ふのが聞えました。すると青年は手に徳利を持つて忌や忌やながら私の方へ近寄つて來ましたが、

「父爺が貴方が飲みたさうだから一杯あげると云ひますから」恚う口を切るのです。私はまごついたたが嬉しいには違ひなかつた。私はふと年寄と見合つてお辭儀をして、斷りかけたんです。すると年



は空を見上げて、

「お飲みなせえまじよ、えい、お飲みなせえよ、わしは貴方を思つて上げるんでさ、兵卒と思つてぢやないんですからよ。兵卒なんか私達のお酒を飲んだからつて親切になるとは思つてませんや」  
「おい卑しい魂性になるなよ！」と私は心中で思ひましたが三杯ぐつとひつかけて彼に禮を云ひました。それから、二人の男は下でやり始めましたがね。しばらくするとサレルチノ生れのウゴウが交代に來たので私はあの二人の百姓は善人だからつて言ひ置いて行きました。その晩のことでした、私が機械庫の扉の前に立つてゐると板瓦が屋根から頭の上へ落ちて來て——それにやひどい怪

我もさせられなかつたが、もう一枚の奴は肩を這つて、そのために左腕がしびれて了ふくらい、ひどく傷られたのですよ」鎖匠は口を大きく開いてから——と笑ひながら眼を半ば瞑つた。

「板瓦、石、棒きれ」彼は笑ひ乍ら云ふ「あの日の事、あの場所のことは今だに忘れられませんや、こふ云ふ生命のない物がひよつとした機でかなり大きな瘤をこしらへたもんです。兵卒が立つてゐたり、歩いてゐたりすると、いきなり棒切れが地面から飛んで來る、石が空から落ちて來る、私達は蠻的にならざるを得ないぢやありませんかね。」

小さい畫家の眼は悲<sup>かなしみ</sup>顔に曇つて、顔は蒼白くなつた。そして物靜



かに

「其麼ことを聞くと恥しくなるね」

「どうすりやいゝのか？誰だつて間誤つきますよ。そこで私は助を呼んだんです。私はある家へ連れ込まれましたが、そこにはもう一人他に寝てゐる者がゐる。見ると顔を石で切られてゐるんです。どうしたのかと私が訊ねると不興氣に笑ひながら言ふには、

「婆さんが、なに白髪の魔女がね、私を打ちなぐつたんですよ、俺は奴を殺してやると云つてやつたがな」

「捕えたのか？」

「俺は自分でやつたんだ、自分で落ちて怪我をしたんだと言つて置

いた。司令官が信じないつてことは其の眼付きで俺には解つてはゐたが、まさか婆さんに傷つけられたとは言ひ悪いからな。ええ？畜生！勿論、彼奴等はひどく迫害されてゐるんだから、俺達を善く思つて居ないことも解つてゐるさ。！」

「うふん！」と私は思ひましたね。醫者が二人の女を連れて來ました。一人は素派らしい美人で慥にベネチアの人でした。もう一人は憶えてゐませんが、なにしろ三人は私の傷を見ました、勿論傷は輕かつたんです。私に繃帶をあてがつて歸つて行きました。」

鎖匠は眉を寄せ、無言のまゝきつく手を擦つた。對手は酒杯に酒を満した。徳利を上げると酒は生命のある紅の火の様に踊つて見え



た。

「私達二人はいつも窓端に腰を掛けてゐました。」鑽匠は暗然と言葉を續けた。「日光が體に當らないやうに座つてゐたのですが、ある日のことです、例の美人の、玉の様な聲が耳についたのです。連の婦人と醫者と三人、窓の外の花園を歩きながら佛蘭西語で話してゐたんです。私はその話がよく解つたので。」

「あの人の眼の色を見て？」と彼女は訊いたのです。「勿論百姓ですが、制服を脱げばきつと此邊の皆の様に社會主義者になるわ。あゝ云ふ眼の人は此の全世界を征服しようとするのです。生活をすつかり改造して、私達を逐ひやつて、なにかあてもない正義に勝

利を得るために私達をめちやくにするのですわ！」

「馬鹿な奴等ですね！」と醫者は云つた。「半分子供で半分禽獸ちくしやうですなア」

「禽獸、さうですわね眞實に、でも子供らしい所がどこにあつて？」

「世界中を平等にするなんて夢想してゐるところはね！」

「全く夢想ですね、牛の眼をした者や鳥の顔をした者が皆な私達と平等ですつて！貴方も、此の婦人むとも私も、劣等な生れの者と平等なんですつて！あの人達みたいに同胞を殺す様に命せられる者と平等……」彼女は熱心に話し續けた、私は耳を聳こはだてて考へまし



たね。

「ほんとにその通りでさ、ねえ、貴方」私はそれまでに幾度も彼女を見たことがあるんです。誰だつて一兵卒より婦人にとりわけ熱心になるのはきまつてゐますものね。私はその婦人が親切で、怜悯で、情愛が深からうと想像してゐました。そしてその當時私は、地所有ちの貴族社會の人間はとりわけ怜悯で、才能があつてどこか親切なものだと云ふ思想をもつてゐたもんです。何故か知りませんがね！私は連に訊きました。

「あの話が解つたかへ？」

いや、連には解らなかつたのです。そこで私は美人の言つた事を

説明してやつたのです。連は悪魔のやうに憤つて、起立つなり部屋を脱出さうとしました。一つの眼をぎよろ／＼させて——片方は繃帯をしてゐたんです。

「さうか！」と囁くのです。「さうなのか？よ、あの女は俺を利用してゐるんだ。俺を人間扱ひにしてゐないのだ。俺はあの女のために自分の威嚴を落してゐるんだ、そして女はそれを無關心でゐるんだ。あの女の財産を保護するために俺は危く俺の生命魂を失しかけてゐる」

この男は馬鹿ぢやなかつたんです、それでひどく侮辱を感じたんです、私も侮辱を感じました。次の日私達は大聲をたて、リ



ユオットオには關はず、この女のことを話し相ひました。リュオットは只だ

「氣をつけるよ、えい、貴様達は兵卒だと云ふことを忘れるな、そして、紀律のあることも忘れるな」と云ひました。

無論それを忘れやしませんでしたさ。然し私達の多数は殆んど皆つても良い位いは、實を言ふと盲目と聾になつてゐたんです。そして若い百姓達は、その私達の盲目と聾をうまく利用したんですね。詰り彼等が克つたんです。彼等は實際によく私達を優遇しました。例へばあの女なんかも彼等から教へられたので他人に誠實があることの價打ちをね。私達は血を流すつもりでやつて来た場

所をいよく立ち去る時になつては、多くは花なんかを貰ふ始末でせう。村の街路を進行して行くと石や瓦が投げられないで花が投げられると云ふわけです。私はそれをとつて置いたと思ひますが、なにしろ、こんな愉快な送別をされると冷酷な待遇なんか忘れて了ふものでしてね！」

鎖匠は心から笑つた。そして言つた。

「貴方の詩になりさうでせう、ヴキンセンゾさん」

畫家は愁しさうな微笑を以つて應へた。

「さうさね。短詩のいゝ題材ですね。何か作れさうな氣がしますよ。だが人間も二十五を越すと抒情詩人としては憐れなもんだか



らね」

彼は皺くちやになつた花を投げ捨て別の花を摘み取つた。そして  
四邊を見廻し乍ら、物静かに、

「人間は母の懐から戀人の懐へ進むと、又、別な幸福へ進まなければならぬものさ」

鎖匠は口をつぐんで酒を酒杯に注いだ。

脚下には穩かに海が囁く。葡萄園の上の熱した空氣の中には花の  
薫りがしきりに流れてゐる。

「私達を怠惰くし、役にたゝなくするのはこの太陽です」鎖匠は吐  
いた。

「僕は近頃満足に抒情詩が作れない、まつたく怪しい程だ」ウキン  
センゾは静かに言ひながら、その薄い眉を寄せた。

「近頃何か書きましたか？」

書家はすぐには答へなかつた。

「さあ、昨日、ホテル、ヨモ、の上で一つ書いたが」恚う云ふて彼  
は低に調子で、悲しげに、歌聲で讀んだ。

「秋の日は静かに沈む、別れんとして

さびしき濱邊の灰色を照す。

飽くなき浪は散ばれる眞砂を噛み、

太陽を冷たき蒼海の中に吸ふ。



秋風は黄葉をふるひ落し

ふるへる空中にもものうくもなげ飛ばす。

空は蒼ざめ、海は憤り、

太陽はなほ微笑みつ、沈み、逝く。」

二人は暫く黙然としてゐた、畫家は頭をたれ、眼をちつと地上に止まつてゐた。大きながつしりした鎖匠は微笑みながら憊う言ひ放つた。

「何んでも綺麗に言へるもんですね。しかしその中でも一番美しいのは善人に就いての言葉ですね、善人の歌ですよ。」

汽船の上



## 汽船の上

藍色の水は油の様に濃く見える。汽船の堆進機<sup>スクリュー</sup>は殆ど音もなく穩かに動いてゐる。甲板<sup>デッキ</sup>の搖ぎ<sup>ゆる</sup>を感じる者もない、帆檣<sup>マスト</sup>は晴やかな空へすつきりと伸び上つて僅に顫えてゐる。樂器の絲の様にびんと張られた帆網が靜に唸つてゐるが、その顫動も慣れるに従つて人の氣にかゝらなくなる。汽船——鵠<sup>スワン</sup>の様に白く柔らかな——は、なめらかな水面にちつと靜まつてゐる。動いてゐるものを見るには舷の所へ廻らなければならぬ、其處では緑の浪が白塗の船腹から飛び散つてゐる。浪は水銀の如く轉び行き、はては夢みる様にきら／＼し



ぶきを飛ばせ乍ら、廣い柔らかな水面へ消えて行く。

朝だ。海は半ば微睡まどろんでゐる。昇日ひのちの薔薇色は未だ空から消えない。吾々は今、うと／＼してゐるゴルゴーナ島を過ぎた所だ。樹木に蔽はれ圓い灰色の塔が一つ立つてゐる嶮しい孤立した巖島である。小さな白色の家の一簇が、眠たげな渚に見える。小さな短艇が三四隻、汽船の左右を素早く走つて行く。島から鰯漁に出かける漁夫が漕いでゐるのだ。長いオールひぶきの飛沫と漁夫の小さな姿とが眼にちらつく。立つて漕いでゐる其の姿はまるで太陽に向つてお辭儀をしてゐるやうに見える。

艦うしろの後に緑の泡の廣い線が延べられる。その上を海鷗がものうげ

に飛んでゐる。折々何處からともなく一羽飛んで現はれる。葉葺はまきの様な翼を張つて、すつと水面を掠かすめては、ふと矢の様に水中に飛び込む。

遠く離れて、リグユリアの紫巒むらの聳ゆる海岸線が、海から立ち昇る雲の様に浮き上つてゐる。もう二三時間すれば汽船は、大理石の街ヂエノアの狭い港へ這入るであらう。

太陽は段々昇つた。日中の暑さが来るのだ。

船員は甲板へ昇つて來た。一人は若くて瘦せてゐる。そしてナポリ人の様に敏活で、顔の表情が絶えず變化する。もう一人は中脊ちゆうせきの男で半白ごましまの口髯を生やし瞳が黒く、丸い頭には銀色の剛毛こわげが生えてゐる。



る。彼は鷲の様な鼻と眞摯で智的な眼を持つてゐる。笑つたり悪戯たりしながら、手早く朝飯の仕度を済ませて分れて終ふ。すると船客が一人二人そろ／＼船室から昇つて来る。眞先のは頭の小さな赤むくみのした顔の、肥つちよである。彼は物悲しげに周囲を見廻してゐるが、だらけてぼてぼてした赤い唇は半分程開いてゐる。其の後から背の高い澤々した男が従いて来た。半白の頬髭を生やし、眼は見えないが低い鼻は平つたい黄色い顔の眞中にボタンの様に附着いてゐる。その後からは階段の黄銅の欄干を獨りで、でつぶり肥つた赤髭の軍隊式に髭を搔いた男が来る。彼は登山者の様な服装をして、帽子には緑色の羽を挿してゐる。

三人共舷の近くで立ち止つた。肥つたのがその悲しげな眼を半分瞑り乍ら口を開く。

「静だねー」

頬髭を生した男はポケットに両手をつつ込み、兩足を擴げて剪刀を開いた様な格好で立つ。赤髭の男は柱時計の振子みたいな大きい金時計を出して、それを見入つてから、やがて空や甲板上に眼を移した。彼はそれから時計を振廻し、兩脚で拍子をととり乍ら口笛を吹き出した。

二人の婦人が昇つて来た。若い方はでつぶり肥つて陶器作のやうな顔、柔和な乳藍色の眼をしてゐる。彼は眞黒な肩は鉛筆で描いた



やうに一方が心もち上つてゐる。老けてゐる方は瘦ぎすでつかねた薄髪が妙に見憎い。彼女の左の頬には大きな眞黒い黒子がある。頸へは二條の金鎖を巻き付け、柄附眼鏡フルユヨシや様々の飾物を灰色の服の帯から垂してゐる。

珈琲が運ばれた。若い婦人は椅子へ静かに腰を卸し肘まで露はした兩腕を烈しく攣はしながら珈琲を注ぎ始めた。

男達も卓子の側へ集る。無言の儘で腰を卸す。肥つたのがコツプを上げ太息を吐きながら言ふ。

「暑くなつて來たな」

「貴方膝へ濡れましてよ」と年上の婦人が諾うなした。

男が打向くと、顎と頬とが胸の上で盛上る。コツプを卓子の上に置き、霜降ズボンに濡れた珈琲を手布ハンケチで拭いてから、汗ばんだ顔を撫なでまわす。

「さうだ」赤髪の男は突然斯う聲高に叫んで短い兩脚を組み替へた。「さうだ、さうだ、民主黨が亂暴狼籍を難詰なんけつしだしても、それは詰り……」

「ジョンお止しなさいよ」と年上の婦人が遮つた。

「リザは出て來ないかしら？」

「気分が悪いのですよ」若い婦人が透すきる聲で應へた。

「海は恁ごん麼に穩かなのにね」



「けれど女はあゝした状態かたの時にはね」

赤髪の男はにたりと微笑して眼を瞑つた。

舷の彼方では海の静穏さを破つて海豚が騒ぎ廻つてゐる。頬髭の男はちつとそれを見詰めながら言つた。

「海豚は豚のやうだ。」

「船にも豚の檻が澤山あるよ」

赤髪の男は斯う口を合せた。

色の褪あた婦人はコップを唇にあてがい、珈琲を嗅いで眉を擡ひそめた。

「苦味さうね」

「乳を入れては、え？」肥つた男はちろりと眼を動かして不安氣な顔つきをしながら、さう言つた。

隅器作みたいな顔の婦人は

「何もかも馬鹿に汚きたないことね、それにあの人達は皆ユダヤ人の様ですわ」

赤髪の男は何事かひそくと頬髭の耳に呶ささやく、宛然まろで學課をすつかり覚え込んだ生徒が、得意氣に教師に答へてゐるやうだ。聽手はくすぐつたげに頭を左右に揺つた。ぼかんと開いた口は乾き切つた板に打抜かれた穴の様に見える。時々何か物言ひたげな素振を見せてゐたが、やがて、



「私共の州では——」と奇聲を發して語りかけたが其のまま口を噤んで、また赤髪の唇へちつと頭を傾ける。

肥つた男はほうつと太息をついて、

「ジョン何をこそく話してるのだ！」

「まあ、ひとつ珈琲を頂いて」と卓子の側へ寄つてがちやく音をたてると相手が、

「ジョンには名案があるんで——」

「貴方は寢足りないのね」年上の婦人は柄附眼鏡から頬髭の男を眺めて言ふ。男は片手で頬を撫でてから手掌てのひらを見てゐる。

「顔に粉が附いてる様な氣がするが、附いてゐないかしら？」

「まあ叔父さん！」若い婦人は叫んだ。「あれが美しい伊太利の特色なのね！ここでは皮膚がひどくがさつくのよ」  
年上の婦人が訊ねる。

「リーヂャ、こゝのお砂糖は悪いと思はない？」

體格の良い一人の男が甲板へ出て來た。半白の鬚髪が帽子の様に見える。鼻は大きく眼は晴やかで、唇の間には葉莖をくわへてゐる。舷の傍に立つてゐた船員がうやくしくお辭儀をした。

「やあ、お早う。お早う」しやうが噎れた高聲で挨拶しながら彼は優しく肯いた。露西亞人の一團はひつそりとして了つた。そしてこの新客にちよいく流眸を與へてゐる。軍隊式の髯を生やしたジョンは小聲



で、

「退職の軍人ですよ。一目で分りませぬ——」  
見られてゐるのを感付いた、半白髪の男は口から葉巻を放し快活  
げに露西亞人の一團に挨拶した。

年上の婦人は頭を後へ反らし、柄附眼鏡を鼻の上につけて、侮り  
氣味にその男を眺めた。赤髪の男はどきまぎして瞳を外らして時計  
を出し、それを振り廻し始めた。肥つた男だけが會釋を認めて顎を  
胸へ引いた。伊太利人ももちくしながら神經的に口の端に葉巻を  
押しつけ中年の船員に低聲で訊ねた。

「露西亞人かね？」

「へえ、露西亞の知事さんと家族の方です」

「いつも人なつこい顔をしてゐられるな」

「實に善い方々です」

「スラブ人の中の一番善い人達さ、無論ね」

「詰らない事には氣を懸けなさらないし」

「氣に懸けない？と云ふと？」

「私にはさう見えるのです。——あの方々は他人様の仕打なんか氣  
にしませんでね。」

肥つた露西亞人は顔を赧らめ、大やうに笑ひ乍ら、聲を潜めて云  
ふ。